

# 長 沖 古 墳 群 XVIII

— 赤坂地区の調査 —

2018

本庄市教育委員会

# 序

埼玉県北部に位置する本庄市には、2万年前に遡る石器が発見された浅見山Ⅰ遺跡をはじめ、県内最古級の古墳として著名な鷲山古墳、室町時代に享徳の乱の舞台となった五十子陣跡など、重要な遺跡が数多く所在しています。

長沖古墳群も、市内児玉町高柳から長沖にかけて、総数210基余りが分布する県内では最大規模の古墳群として知られ、埼玉県の重要遺跡に選定されています。

本書に報告する赤坂地区の調査では、古墳以外にも、古代の竪穴住居、掘立柱建物などが検出され、周辺が居住空間としても機能していた時代があったことが、新たに判明いたしました。また調査区域からは多数の縄文土器片も出土し、遺跡の形成過程が、思いのほか長く複雑なものであることを知ることになりました。

地域に育まれたかけがえのない埋蔵文化財は、郷土の歴史を理解するための基礎資料であり、私たちの文化的な生活や地域の未来を切り開くための糧となるものです。ここに上梓した報告書は、ささやかなものではありませんが、今後はこの報告書が、学術研究や教育にたずさわる方々の資料として、また市民各位の郷土学習の材料として、幅広く活用されることを願ってやみません。

最後に、現地調査から出土資料の整理、本書の刊行に至るまで、ご協力いただきました関係諸機関、地元住民の方々に心からの御礼を申し上げます。

平成30年3月

本庄市教育委員会  
教育長 勝山 勉

# 例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町金谷字赤坂に所在する長沖古墳群赤坂地区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、旧児玉町の町道改良舗装工事に伴い、記録保存を目的として、旧児玉町教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査期間は以下のとおりである。  
自 平成7年12月10日 至 平成8年3月25日
4. 発掘調査面積は町道建設予定地にかかる1,200㎡である。
5. 発掘調査は旧児玉町教育委員会徳山寿樹が担当した。
6. 整理調査期間は以下のとおりである。  
自 平成29年4月1日 至 平成30年1月21日
7. 整理調査は本庄市教育委員会文化財保護課太田博之が担当した。
8. 本書の執筆はⅢ-7 遺構外出土遺物の縄文土器の項を本庄市教育委員会文化財保護課松本完が、その他を太田が担当した。
9. 本書の編集は太田が担当した。
10. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関する資料は本庄市教育委員会において保管している。
11. 整理調査から報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

池田匡彦 井上裕一 車崎正彦 昆 彭生 坂本和俊 金子彰男 中沢良一  
丸山 修

12. 本報告の整理調査および報告書編集・刊行に係る本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 勝山 勉

教育委員会事務局

事 務 局 長 稲田幸也

文化財保護課

課 長 杉原 初

課長補佐兼

文化財保護係長 太田博之

課長補佐兼

埋蔵文化財係長 恋河内昭彦

埋蔵文化財係

主 査 松本 完

主 査 徳山寿樹

主 査 塩原 浩

主 任 的野善行

臨 時 職 員 中嶋淳子

# 凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は、世界測地系に基づく。各遺構における方位針は、座標北を示す。
2. 本書掲載の図面のうち、遺構図の縮尺は、各図に明示している。  
遺物実測図の縮尺は、すべて1/4に統一している。
3. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
4. 遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を示す。
5. 挿図中で用いた遺構の記号は、以下の通りである。  
ST－古墳    SI－住居    SK－土坑    SD－溝
6. 遺物観察表に記した記号は、以下の通りである。  
A－法量（単位はcm）    B－成形    C－整形・調整    D－胎土、材質、含有物  
E－色調    F－残存度    G－備考
7. 本文および土層注記において取り上げた火山噴出物については、以下の通りに略記している。  
As-A    : 浅間A軽石[天明3（1783）年]  
As-B    : 浅間B軽石[天仁元（1108）年]  
Hr-FA    : 榛名二ツ岳渋川テフラ[5世紀末葉]
8. 本書掲載の長沖古墳群分布図および遺跡の位置図は、本庄市都市計画図1/2,500に加筆して使用した。
9. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

# 目 次

序  
例言  
凡例  
目次

第Ⅰ章 遺跡の環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
第Ⅱ章 長沖古墳群の概要	4
第Ⅲ章 調査の成果	8
1 調査の概要	8
2 古墳	8
3 住居	12
4 掘立柱建物	14
5 土坑	15
6 溝	15
7 遺構外出土遺物	19

参考文献  
写真

# 挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	1
第2図	長沖古墳群古墳分布図	5
第3図	遺構位置図	6
第4図	遺構全体図	7
第5図	174号墳平面図・断面図	8
第6図	175号墳平面図・断面図	9
第7図	175号墳出土遺物	10
第8図	209号墳平面図・断面図	11
第9図	210号墳平面図・断面図	11
第10図	1号住居平面図・断面図	12
第11図	1号住居出土遺物	12
第12図	2号住居平面図・断面図	13
第13図	2号住居出土遺物	14
第14図	1号掘立柱建物平面図・断面図	15
第15図	1～16号土坑平面図・断面図	16
第16図	溝平面図・断面図(1)	17
第17図	溝平面図・断面図(2)	18
第18図	溝平面図・断面図(3)	19
第19図	遺構外出土遺物(1)	20
第20図	遺構外出土遺物(2)	21
第21図	遺構外出土遺物(3)	24
第22図	遺構外出土遺物(4)	25

# 写真目次

- |     |                                               |      |                                                          |
|-----|-----------------------------------------------|------|----------------------------------------------------------|
| 写真1 | 調査着手前状況 [西から]<br>調査着手前状況 [東から]<br>調査区風景 [西から] | 写真6  | 14号土坑 [北から]<br>9・10号溝 [南東から]                             |
| 写真2 | 調査区風景 [西から]<br>調査区全景 [東から]<br>調査区全景 [東から]     | 写真7  | 9・11・12号溝 [南東から]<br>12・13号溝 [東から]<br>14号溝 [西から]          |
| 写真3 | 174号墳 [北東から]<br>174号墳 [南西から]<br>175号墳 [東から]   | 写真8  | 20・21・22号溝 [東から]<br>27・28号溝 [西から]<br>15・16号土坑・28号溝 [東から] |
| 写真4 | 209号墳 [北から]<br>1号住居 [南東から]<br>2号住居 [南西から]     | 写真9  | 175号墳出土遺物<br>1号住居出土遺物<br>2号住居出土遺物<br>遺溝外出土遺物(1)          |
| 写真5 | 1号掘立柱建物 [南東から]<br>8号土坑 [北から]<br>12号土坑 [北から]   | 写真10 | 遺溝外出土遺物(2)                                               |
| 写真6 | 13号土坑 [北から]                                   | 写真11 | 遺溝外出土遺物(3)<br>遺溝外出土遺物(4)<br>遺溝外出土遺物(5)                   |

# 第 I 章 遺跡の環境

## 1 地理的環境

本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地が所在する台地、さらにその南方に連なる丘陵・山地とに大別される。

低地には利根川や烏川の氾濫による自然堤防・旧河道が発達し、東側は現在の利根川に沿って、妻沼低地から中川低地へと連続している。

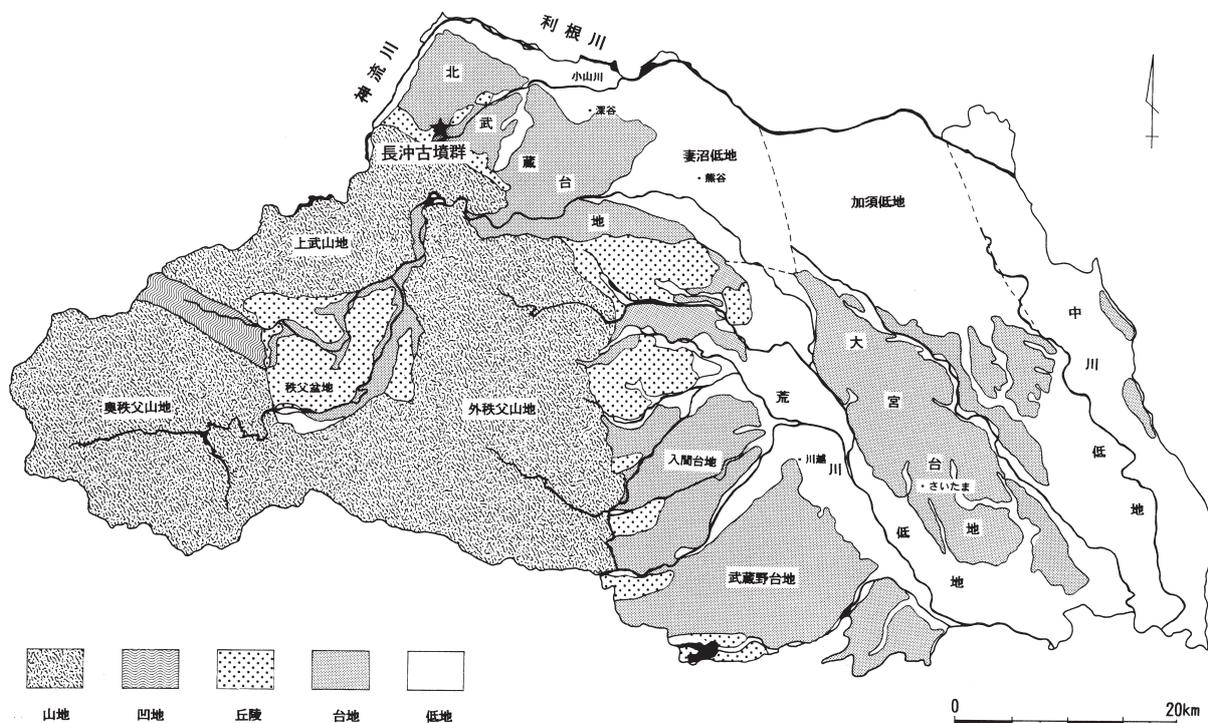
台地は、本庄台地と呼称され、身馴川（小山川）扇状地と神流川扇状地との複合地形で、いずれも立川期に相当するものとされている。

身馴川（小山川）扇状地は、西側を第三期の残丘である生野山、大久保山などの丘陵に、東側を第三期の松久丘陵や武蔵野期に相当する櫛引台地によって画され、小山川、志戸川、天神川などの中小の河川が北東方向へ流下している。河川の周辺においては沖積化が顕著で、自然堤防状の微高地が発達しており、古墳時代以降の多くの遺跡が、この微高地上に立地している。

一方、神流川扇状地は、群馬県藤岡市浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる河川に女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。

山地は上武山地の南縁にあたり、奥秩父山地などに比べて浸食が進み、谷が広く、比較的起伏の少ない地形を特徴としている。

本書に報告する長沖古墳群は、本庄市児玉町高柳から同長沖にかけての丘陵端部と丘陵から連続する台地上に立地している。



第 1 図 埼玉県の地形

## 2 歴史的環境

今日までの調査で、長沖古墳群内には、縄文前期～中期および古墳時代前期の竪穴住居も存在することが明らかになっている。実際、本書に報告する赤坂地区においても、縄文時代中期の住居跡が検出されているが、縄文前・中期、古墳時代前期ともに集落としての総体的な状況は判明していない。そこで本節では、児玉地域における古墳の出現から終焉までを通覧し、周辺古墳との関係を見ることで、長沖古墳群の歴史的環境を確認しておきたい。なお、本節でいう児玉地域とは本庄・美里・上里・神川4市町の範囲を指す。また、文章中では、必要に応じ東に隣接する深谷市域所在の古墳についても言及する。

本庄市鷲山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である（坂本1986）。女堀川中流域の丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形に広がる前方部の平面形や手焙形土器の出土から、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は、口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部のみに穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階の資料とする理解も可能であり、築造は前方後円墳集成畿内編年3期（以下、集成〇期と略す）に下るものと考えられる。

大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山1号墳は円墳と考えられてきたが、本庄市教育委員会による確認調査の結果、全長70mを超える埼玉県内では最大規模の前方後円墳であることが明らかとなった。後円部上段に葺石を備え、周堀をめぐらせているが、埴輪はもたず、出土した土師器の型式から集成4期の築造が考えられる。美里町長坂聖天塚古墳（径50m）は志戸川右岸の丘陵上に占拠する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む刀子形石製の形態などから、古墳時代前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期の築造とされる。北堀前山1号墳に近接して所在する北堀前山2号墳は、従来、径28mの円墳とされてきたが、本庄市教育委員会による第2・3次調査の結果、一辺30m前後の方墳となることが確認された。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか、周堀から土師器埴が検出されている。

集成6期を前後する時期には、生野山丘陵の本庄市生野山將軍塚古墳（径60m）、同金鑽神社古墳（径68m）、女堀川流域の本庄市公卿塚古墳（径60m）などの大型の円墳が相次いで築造される。児玉地方で古墳がもっとも大型化するのはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葺石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では、埴輪の製作に格子タタキ技法を用いていることが知られている。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べてやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳（径40m）、小山川上流域の本庄市長沖157号墳（径32m）では有黒斑の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組

成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている。

集成7・8期になると、前段階のような直径60mクラスの大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳（径34m）、生野山丘陵の生野山9号墳（径42m）など30～40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳（径12m）、同77号墳（径14m）、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳（径19m）、同2号墳（径12m）、同三壱山2号墳（径22m）などいずれも10m～20m前半台の小型円墳で、円筒埴輪の外周二次調整にB種ヨコハケを用いる二条突帯の円筒埴輪を樹立し、TK208型式の須恵器などを伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、深谷市白山古墳群などはやや遅れて、外周二次調整を欠く二条突帯の円筒埴輪とTK23・47型式の須恵器などを出土する群集墳である。神川町青柳古墳群では、集成9期前半に、横穴式石室を導入することが知られている。

集成10期に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展に伴ってこの時期新たに出現してくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

なお、集成9期以降には、首長墓として、再び前方後円墳が採用されるようになる。小山川水系では、本庄市秋山古墳群の秋山諏訪山古墳（主軸長60m）、同生野山古墳群の生野山銚子塚古墳（同58m）、生野山16号墳（同58m）、深谷市四十塚古墳群の寅稻荷古墳（同52m）、本庄市塚合古墳群の大林二子山古墳（規模未詳）などが知られ、神流川流域では、神川町青柳古墳群の白岩銚子塚古墳（主軸長46m）などがある。

終末期には、前方後円墳に代わる首長墓として、深谷市前原愛宕山古墳（辺37m）のような大型の方墳や旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳（径38m）のような大型の円墳が採用されている。また各地の群集墳も後期後半段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、児玉地域で4箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。児玉地域では、鴻巣市生出塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵端部に位置し、埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、焼土層の落ち込みとして12基を確認している。本庄市八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した。その後、1961年に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している。

本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際し、焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている。本庄市宥勝寺裏埴輪窯跡は近年の確認調査で、5基以上の窯跡が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。遺物は靱形埴輪4点、翳形埴輪1点をはじめ、家、大刀、靱、馬、人物など多量の形象埴輪を出土している。操業時期は6世紀後半段階と推定される。

## 第Ⅱ章 長沖古墳群の概要

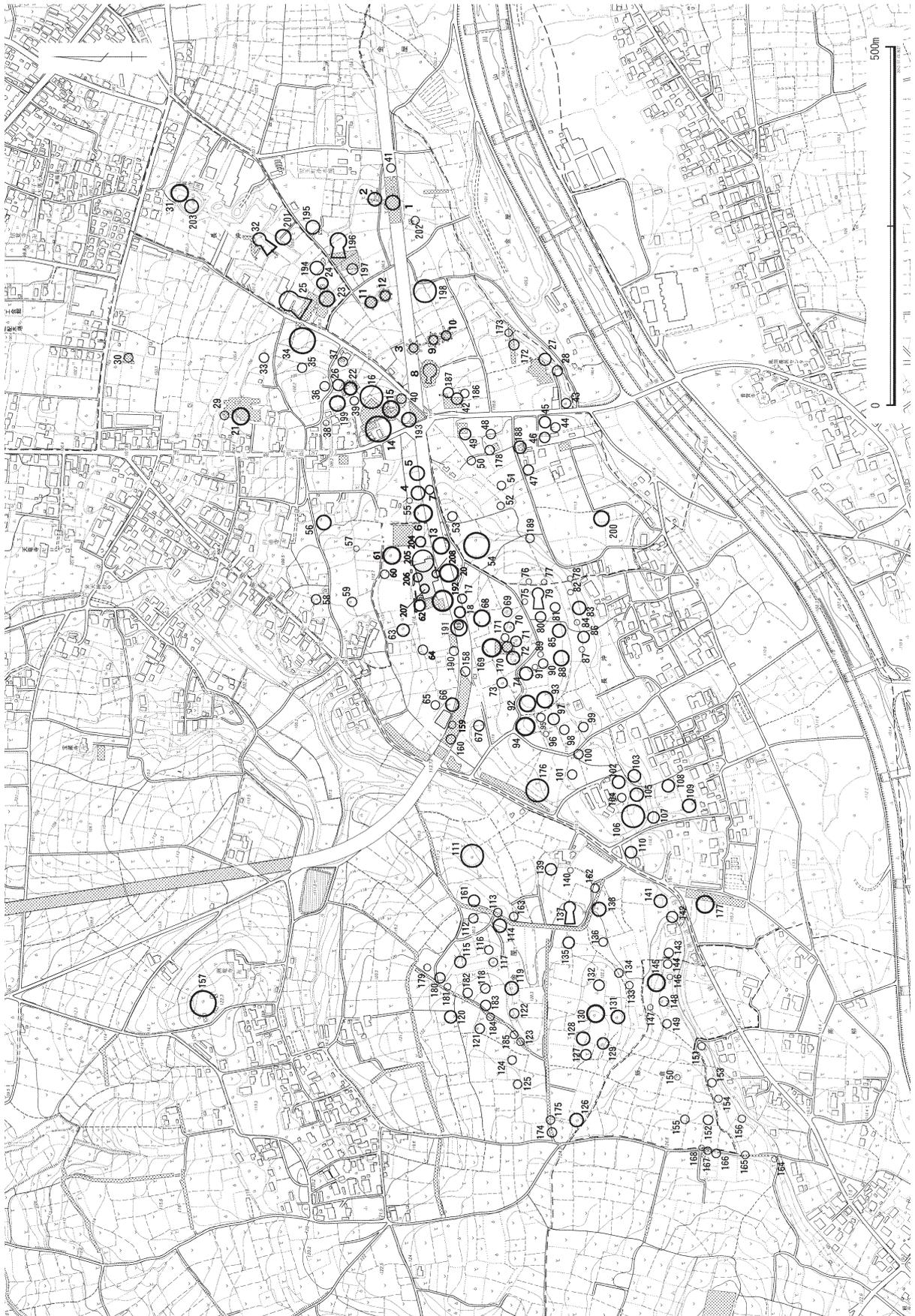
長沖古墳群は古墳時代中期から終末期にかけて形成された埼玉県内最大規模の群集墳である。旧児玉町の市街地南方にあって、北東方向に流下する小山川左岸の丘陵部から台地面にかけて立地し、分布範囲は、東西1,700m、南北500mに及ぶ。古墳群北方の丘陵上に、単独で存在する157号墳を除き、平成30年1月現在までに前方後円墳5、帆立貝形古墳1、円墳204の計210基を数え、これに加えて、確認調査により周堀が確認されたものの、未編号となっている古墳も複数存在する。以下、「前方後円墳集成畿内編年」（広瀬1992）に拠り、時期を追って古墳群の変遷を確認する。

調査によって築造時期の判明している古墳の中では、14号墳が最も古い（恋河内2012）。直径28mの円墳で、外面二次調整B種ヨコハケ・無黒斑の円筒埴輪、家形と思われる形象埴輪片が出土し、築造時期は「前方後円墳集成畿内編年」の7期（以下「集成〇期と略記する」）である。ただし、東隣に所在する15号墳の周溝からは、野焼きによると思われる突出度の高い三条突帯の円筒埴輪が出土している。15号墳は直径19mの円墳で、二条突帯の円筒埴輪をもつ集成8期の古墳であることから、付近に集成6期以前の大型古墳が存在したと考えられる（菅谷ほか1980）。また、14・15号墳の北東約150mの地点に所在した34号墳でも、古相の円筒埴輪片が検出されている（菅谷1984）。外面調整は一次タテハケのみで突出度の高い突帯をもち、外面に赤彩が見られ、野焼きによると思われる資料であることから、同墳の築造時期を集成6期以前とする見解が示されている（坂本2008）。このほかに直径31mの円墳である54号墳も、7期以前の築造とする意見がある（坂本2008）。

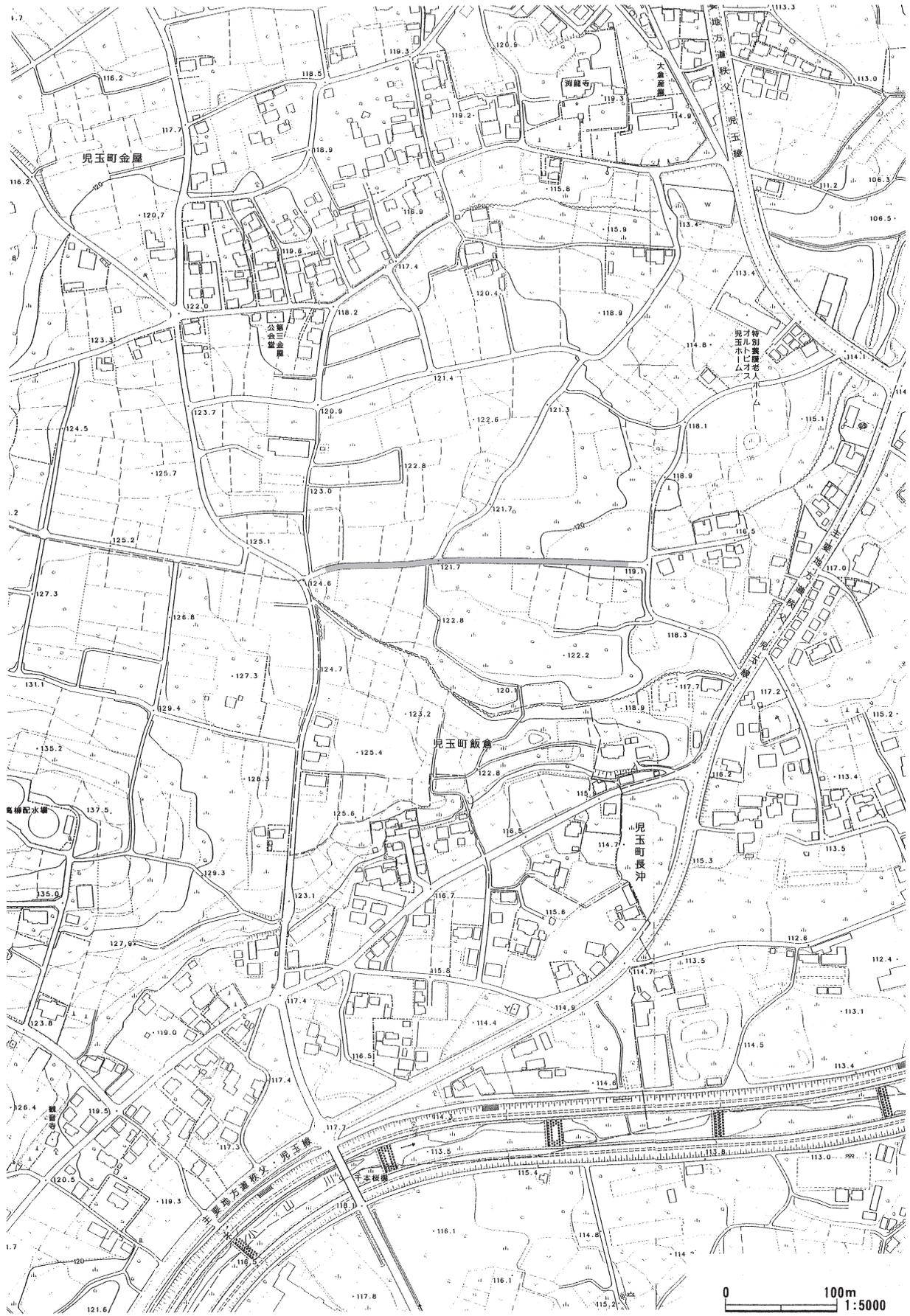
つづく集成8期には、15号墳、172号墳、173号墳など、直径20m以下の小型円墳の造営が見られる。いずれも墳丘を失っているが、規模の大きな古墳には埴輪が伴う。「古式群集墳」や「初期群集墳」と呼びうるような密集形態の小型円墳群は、いまのところ確認されていないが、集成8期を中心とした時期の簡易な竪穴系埋葬施設を備えた小型円墳は、墳丘を失っている場合がほとんどと思われる。今後の調査で検出例を増す可能性が高い。横穴式石室は集成9期に導入されているらしい。導入の当初には、先ず短冊形無袖式横穴式石室が採用され、集成10期に入って両袖式石室が現れる。その後、集成10期のうちに模様積みによる胴張型石室へと移行するようである。

古墳群内に所在する6基の前方後円墳・帆立貝形古墳のなかで、築造時期が判明するものは、いずれも集成9・10期に帰属する。137号墳は第一段の幅が広い二条突帯の円筒埴輪をもち、集成10期の築造が確実視される。32号墳では、靱などの器財埴輪とともに、二条および三条突帯の円筒埴輪が出土している。二条突帯の円筒埴輪は第一段幅が伸長しておらず、築造時期は137号墳よりも遡るであろう。三条突帯の円筒埴輪を出土することから、墳丘規模は137号墳を上回ることが推測される。帆立貝形古墳の8号墳は、埋葬施設に古相と考えられる胴張型横穴式石室を採用し、埴輪、TK209型式期の須恵器甕を出土することから、集成10期後半の築造が推定される（菅谷ほか1980）。

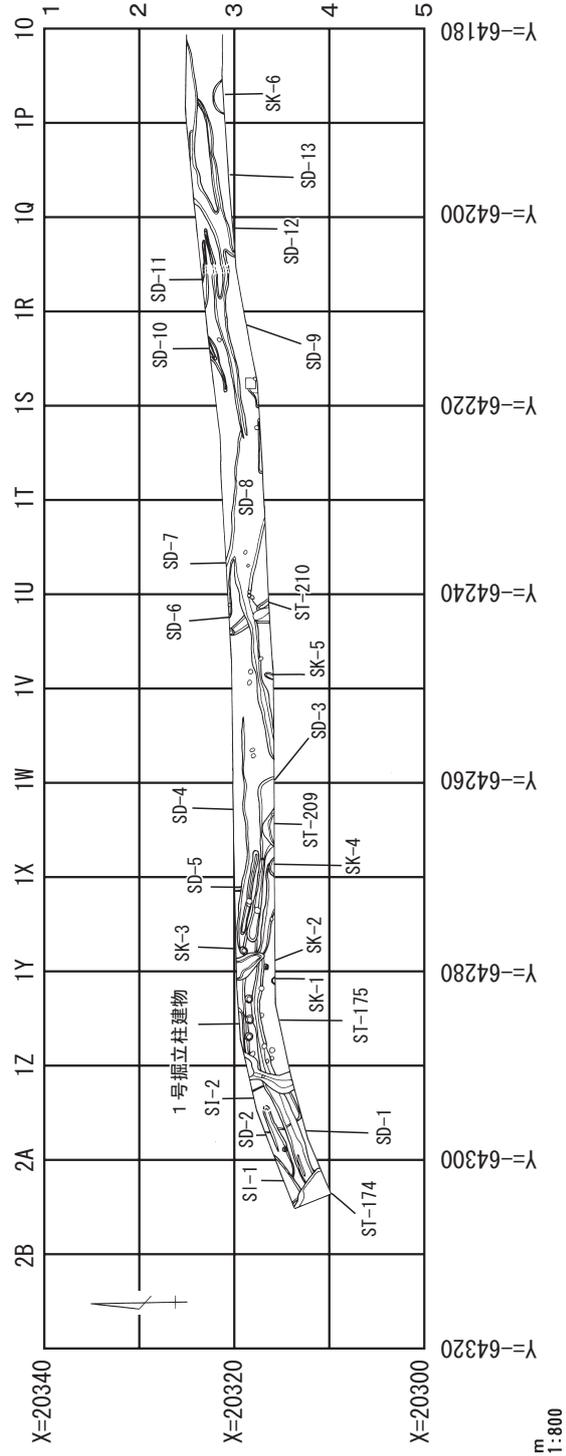
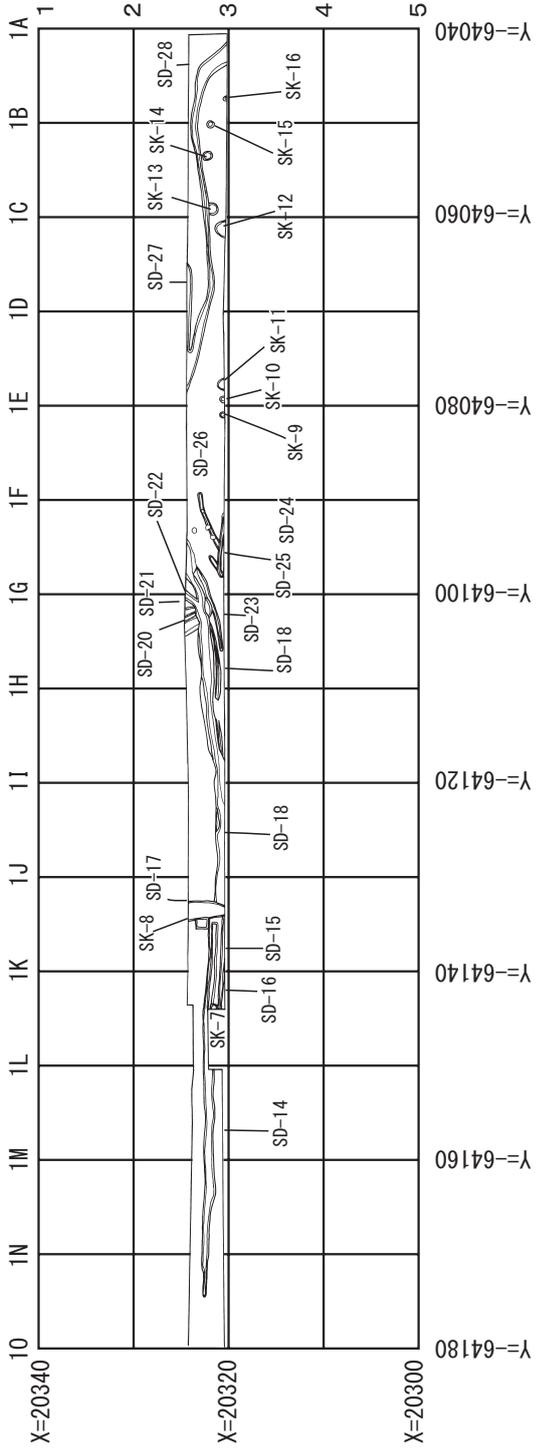
終末期には、盟主墳的な大型の円墳や方墳が見られず、横穴式石室を備える小型の円墳が数多く築造されている。8世紀代に下る古墳は、今のところ確認されず、7世紀後半のうちに築造を停止するようである。なお、単独墳である157号墳は、直径32mの円墳で、出土した円筒埴輪の外面二次調整にB種ヨコハケと黒斑が観察される（日高1994）。築造時期は長沖古墳群の初現に近く、集成5～6期に該当するだろう。



第2図 長沖古墳群古墳分布図



第3図 遺構位置図



第4図 遺構全体図

# 第三章 調査の成果

## 1 調査の概要

長沖古墳群赤坂地区は小山川右岸の児玉丘陵上に位置し、付近の標高は約120mを測る。本報告の調査区において検出された遺構は、古墳4基、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土坑16基、時期不詳の溝28条である（第4図）。このうち、古墳、竪穴住居、掘立柱建物といった主たる遺構は、調査区の西寄り4分の1の範囲にまとまっている。古墳は以前から存在が推定されていた174・175号墳に加え、新たに2基の古墳の周堀を検出したことから、それぞれ209・210号墳と编号した。竪穴住居は174号墳と175号墳の空隙を埋めるような位置に検出している。また、掘立柱建物は、175号墳北側の墳丘裾部および周堀と重複している。土坑は調査区の各所に散在し、とくに有意なまとまりをなさない。溝は掘り込みが浅く、蛇行しながらも、調査区とおおよそ並行して走行するものが多い。

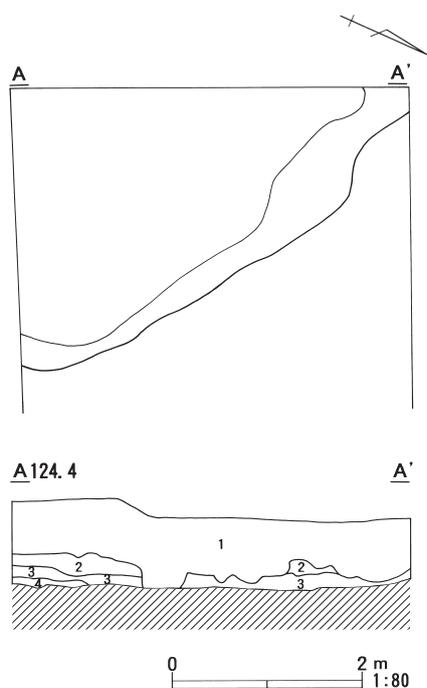
## 2 古墳

### (1) 174号墳（第5図）

174号墳は、すでに墳丘を失っているものの、周辺の地割りなどによって、以前から存在が推定されていた古墳である。本調査では、調査区西端の2A-3・4グリッドにおいて、周堀の一部と考えられる不整形な落ち込みが検出されている。墳形や墳丘規模の詳細は明らかではないが、古墳の中心は調査区西端の南西側にあったものと推定される。

周堀覆土は、現耕作土直下の第2・3・4層で、上層がAs-Bを多量に含む黒色土、下層がAs-Bを含まない黒色土で、周堀底面の一部に暗黄色土が薄く堆積する。

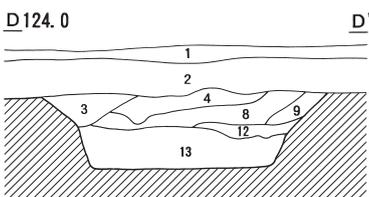
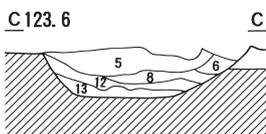
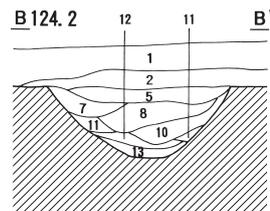
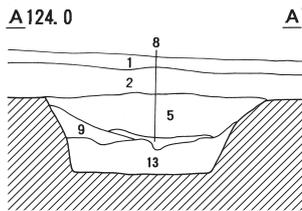
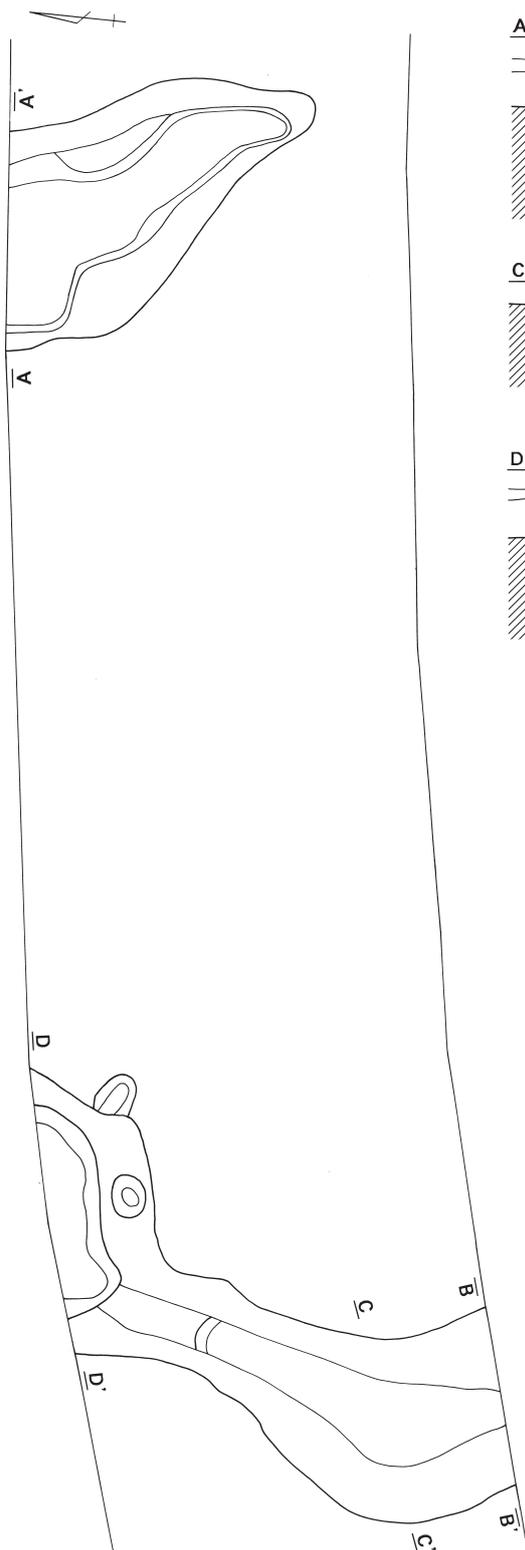
遺物は出土しておらず、築造時期は不明である。



#### 174号墳土層説明

- 1 明灰色土 現耕作土層。
- 2 黒色土 As-Bを非常に多く含む。しまり・粘性が若干ある。
- 3 黒色土 As-Bを含まない。しまり・粘性が若干ある。
- 4 暗黄色土 暗褐色土とロームの漸移層。

第5図 174号墳平面図・断面図



175号墳土層説明

- 1 明灰色土 現耕作土層。As-Aを多く含む。
- 2 明灰色土 As-Aを少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を若干含む。しまり・粘性が若干ある。
- 4 黒褐色土 径1mm以下の白色粒子を若干含む。しまり・粘性が若干ある。
- 5 黒褐色土 ローム粒を含み、As-Bを若干含む。しまり・粘性が若干ある。
- 6 暗褐色土 径1～3mm程のローム粒を含む。しまり・粘性が若干ある。
- 7 黒褐色土 径1～3mm程の炭化物粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。
- 8 黒色土 径1mm以下の黄色、肌色粒(軽石粒?)を含む。しまり・粘性が若干ある。
- 9 暗褐色土 径10mm程のローム粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。
- 10 黒色土 8層に類似するが、色調がやや明るく、黄色粒を含まない。しまり・粘性が若干ある。
- 11 明黄色土 ロームの風化土を多く含む。しまり・粘性ともにある。
- 12 暗褐色土 径1mm以下のローム粒を多く含む、径1mm程の炭化物粒を含む。しまり・粘性が若干ある。
- 13 黄褐色土 ローム粒・径10～50mmのロームブロックを多く含む。しまり・粘性が若干ある。

第6図 175号墳平面図・断面図

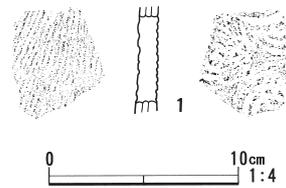
## (2) 175号墳 (第6・7図)

174号墳と同じく、周辺の地割りなどによって、以前から存在が推定されていた古墳である。1X-3グリッドから1Z-3グリッドにかけて、円形にめぐる周堀を検出している。周堀の規模および形状から、直径13m程度の円墳であったと推定される。古墳のほぼ中央を調査区が横切っているが、墳丘は完全に消失し、埋葬施設の痕跡は認められない。

周堀の幅は一定ではなく、確認面で1.4~2.4mを計測する。古墳の東側にあたる1X-3グリッドでは途切れる箇所が見られる。確認面以下の掘り込みも一様ではなく、調査区の北壁沿いには、堀幅が広く、地山であるローム層を深く掘りこんで、ローム層下に発達する礫層近くに達している箇所がある。

表土である第1・第2層を除いた第3層以下が周堀の覆土である。上位の第3層から第8層および第10層までが黒色ないし黒褐色系の土層で、とくに第5層ではAs-Bの混入が観察される。下位の第9・第12層は、暗褐色系の土層に変わり、第12層には細かな炭化物粒の混入が認められる。また、北壁沿いの深掘り箇所では、最下層に大型のロームブロックを多量に含む黄褐色土が厚く堆積している。

遺物は、混入資料と思われる須恵器甕の胴部の破片1点が検出されている。外面に格子状の叩き目、内面に当て具痕の青海波文が観察される。胎土には白色粒を含み、焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈する。埴輪をもたないと見られることから、築造時期は古墳時代終末期と推定される。



第7図 175号墳出土遺物

### 175号墳出土遺物観察表

1	須恵器 甕	B. 粘土紐積み上げ後叩き。C. 外-胴部格子状叩き目。内-胴部当て道具痕(青海波文)。D. 白色粒。 E. 内外-灰色。F. 胴部破片。G. 還元焰焼成。
---	----------	-----------------------------------------------------------------------------------

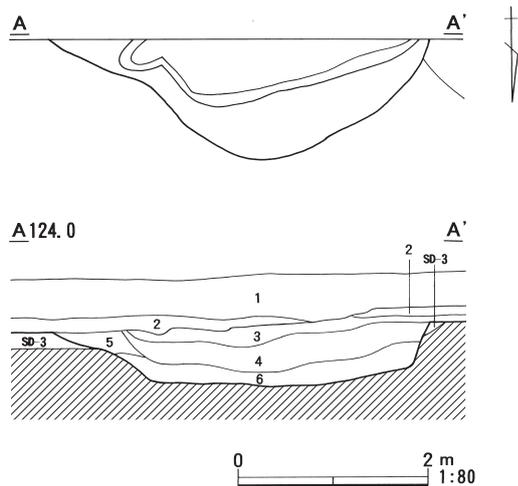
## (3) 209号墳 (第8図)

1W-3グリッドにおいて、周堀の一部が検出されている。今回の調査において周堀が発見されたことにより、はじめて存在が確認された古墳である。

周堀は、調査区の南壁に沿って、深めの落ち込みが検出されているのみであるが、古墳時代後・終末期の小型古墳に特徴的な、不定形にめぐる周堀の一部であろう。規模・墳形などの詳細は不明ながら、墳丘は調査区の南側に存在したことが推定される。

周堀覆土は、第3~6層である。上層の第3層は、少量のAs-Bを含んでいる。4・5層はローム粒の含有量がわずかに相違するものの、ともに黒色土層で、形成時期に差はないと見て良いだろう。周堀底を被覆して堆積する最下層の第6層には、最大10mmのロームブロックが多量に含まれている。

遺物は出土していないが、周堀の形状から古墳時代後期末葉または終末期の築造と推測される。



#### 209号墳土層説明

- 1 明灰色土 現耕作土層。As-Aを多く含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 3 黒褐色土 As-Bを微量含む。しまり・粘性が若干ある。
- 4 黒色土 径1mm程のローム粒・肌色粒(As-B?)を含む。しまり・粘性ともにある。
- 5 黒色土 4層に類似するが、1層より暗い。ローム粒・肌色粒の含有量が少ない。
- 6 暗褐色土 径1~10mm程のローム粒を多く含む。しまり・粘性ともにある。

第8図 209号墳平面図・断面図

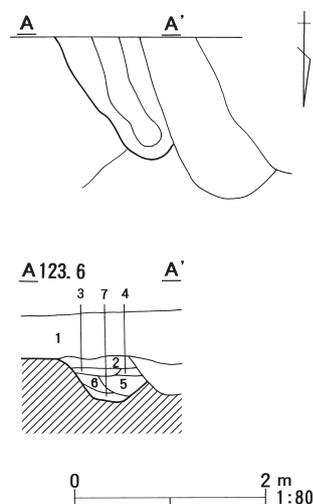
#### (4) 210号墳 (第9図)

1U-3グリッドにおいて、周堀の一部が検出されている。209号墳と同じく、今回の調査において周堀が発見されたことにより、はじめて存在が確認された古墳である。

周堀は、調査区の南壁から、北北西方向に1.4mほど伸びたところで途切れている。確認面での堀幅は0.8mほどで、小規模な円墳であったと考えられる。1V-3グリッド付近で、対向する周堀が検出されることも考えられるが、調査区内には当該古墳の周堀を検出できておらず、墳丘規模等の詳細については不明である。

周堀覆土は、表土である第1層を除いた第2層以下である。上位の第2層および第4・5層は、黒色系の土層で、とくに、最上層の第2層は、As-Bの混入を認める。下位の第6・第7層は、暗褐色系の土層に変わり、ともに多量のロームブロックを含んでいる。

遺物は出土しておらず、築造時期は不明である。



#### 210号墳土層説明

- 1 明灰色土 現耕作土層。As-Aを多く含む。
- 2 黒色土 As-Bを含む。しまり・粘性ともにある。
- 3 暗褐色土 ロームの風化土をやや多く含む。しまり・粘性ともにある。
- 4 黒色土 径1mm以下の肌色粒を若干含む。しまり・粘性ともにある。
- 5 黒色土 4層に類似するが、さらに黒みが増す。しまり・粘性ともにある。
- 6 暗黄色土 径1~20mm程のローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともにある。
- 7 暗褐色土 径1~30mm程のローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともにある。

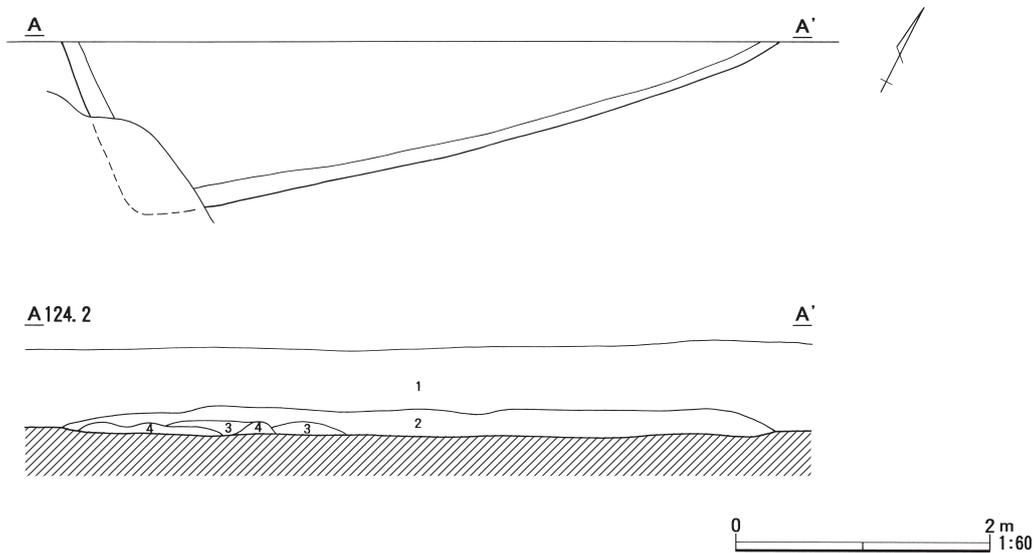
第9図 210号墳平面図・断面図

### 3 住居

#### (1) 1号住居 (第10・11図)

調査区の北端近く、1Z-3、2A-3グリッドに位置し、住居全体のうち南側の1/4ほどを検出している。南西の隅が174号墳と重複している。平面形状は不明であるが、南東側の壁はわずかに湾曲しながら5.4mほど伸びている。主軸方向は、ほぼN-50°-Eを示す。確認面から床面までの深さは10cm前後と浅く、覆土は、西寄りの床面に白色粒やロームブロックを含む暗褐色系の土層が見られるほか、大半は炭化物粒を含む黒色土が占めている。柱穴は、調査の範囲内には検出されず、竈、貯蔵穴、壁溝、貼床なども確認されない。

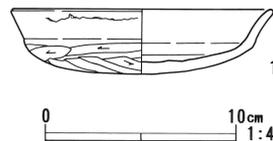
遺物は、土師器坏1点のほか、少量の土師器片を出土している。杯は、須恵器杯蓋模倣杯で、口縁部は外面に稜をもたずに大きく開く。



#### 210号墳土層説明

- |                                   |                                         |
|-----------------------------------|-----------------------------------------|
| 1 明灰色土 現耕作土層。                     | 3 暗褐色土 径1mm程の白色粒を若干含む。しまり・粘性が若干ある。      |
| 2 黒色土 径1～2mmの炭化物粒を含む。しまり・粘性が若干ある。 | 4 暗褐色土 径10mm程のロームブロックを多く含む。しまり・粘性が若干ある。 |

第10図 1号住居平面図・断面図



第11図 1号住居出土遺物

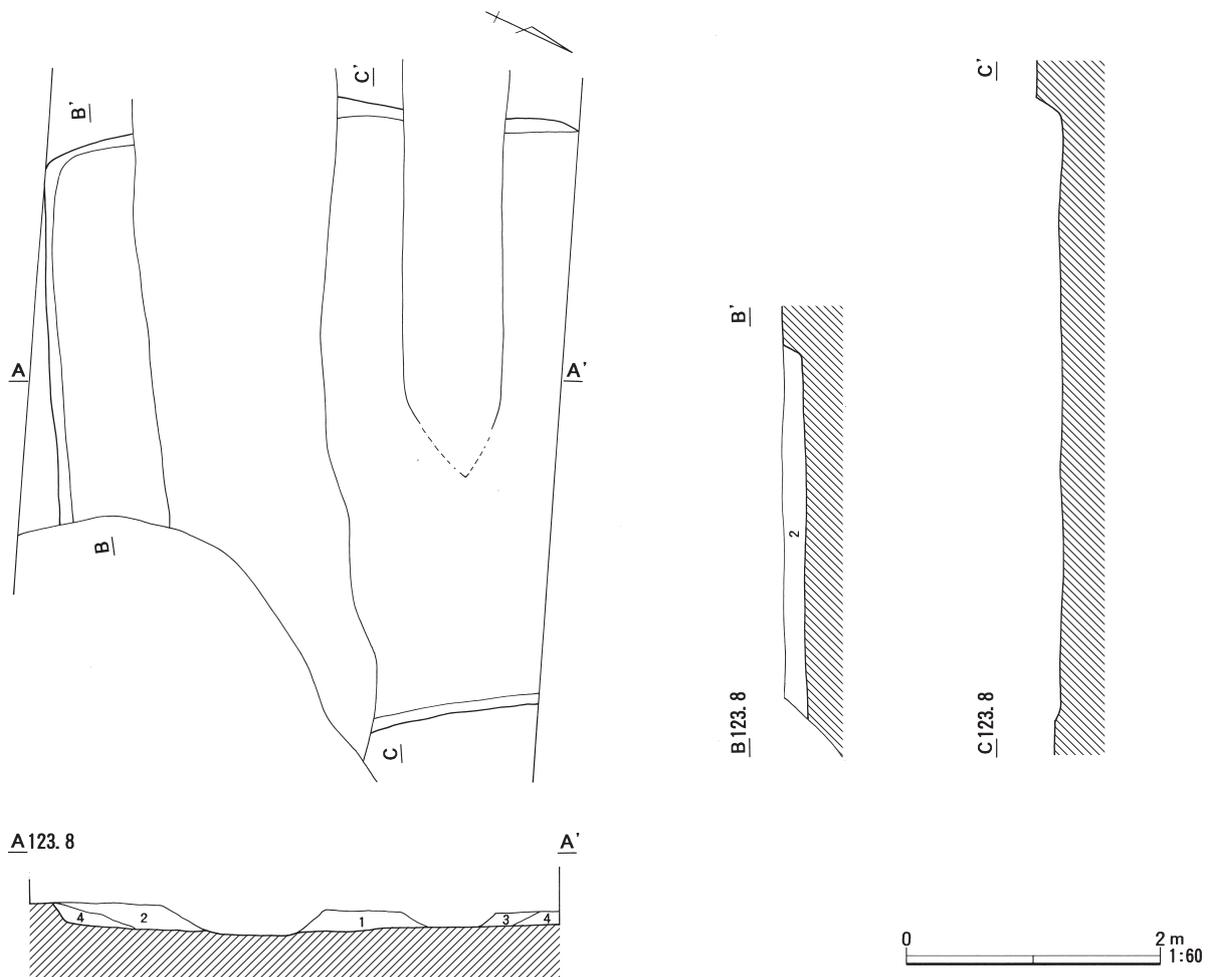
#### 1号住居出土遺物観察表

1	土師器 坏	A. 口縁部径13.7、器高3.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外-口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内-口縁部～体部ヨコナデ。底部匏ナデ。D. 白色粒・黒色粒・石英。E. 内外-にぶい橙色。F. 3/4。
---	----------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------

(2) 2号住居 (第12・13図)

1Z-3グリッドにあって、1号住居の東側に近接した位置にある。南東隅が175号墳と重複するほか、1・2号溝が住居の中央を横切って東西に走行している。東西約5mほどの規模を有し、平面形はほぼ正方形をなすものと思われる。主軸方向はN-20°-Wを示す。確認面から床面までの深さは約20cmほどで、覆土は中央にローム粒を含む暗褐色土、壁沿いに同じくローム粒を含む黒色土が堆積している。床面を広く検出しているが、柱穴は検出されず、竈、貯蔵穴、壁溝、貼床なども確認できない。

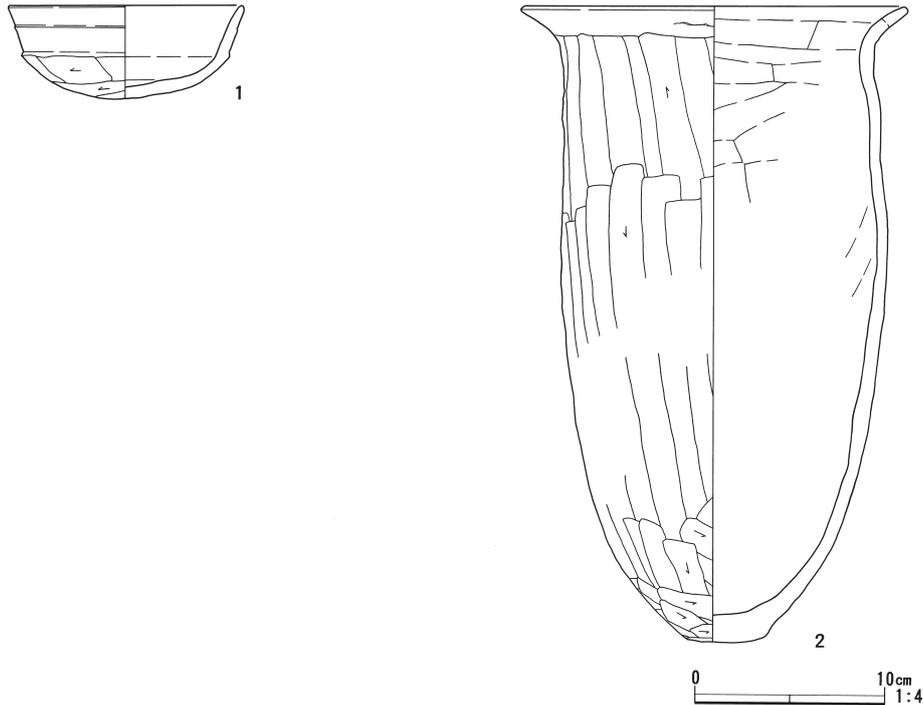
遺物は、土師器坏・甕各1点のほか、少量の土師器片を出土している。杯は、須恵器杯蓋模倣杯で、口縁部が外反し、外面には1条の稜が見られ、深めの身を有する。甕は口縁部が大きく外反し、口径が胴部最大径を上回る。胴部はほとんど膨らまずに長く伸びて、最大径は中位よりもやや上方に位置する。底部は分厚く成形され、外面調整も胴部に比べ粗雑である。これらの遺物から、本住居の時期



210号墳土層説明

- |                                          |                                           |
|------------------------------------------|-------------------------------------------|
| 1 黒色土 径1~3mm程のローム粒を若干含む。し<br>まり・粘性が若干ある。 | 3 暗褐色土 径1~5mm程のローム粒を多く含む。し<br>まり・粘性が若干ある。 |
| 2 黒色土 径1mm以下のローム粒を含む。し<br>まり・粘性が若干ある。    | 4 黒色土 径1mm程のローム粒を含む。し<br>まり・粘性が若干ある。      |

第12図 2号住居平面図・断面図



第13図 2号住居出土遺物

2号住居出土遺物観察表

1	土師器 坏	A. 口縁部径12.4、器高4.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外-口縁部ヨコナデ、中位に弱い段を有する。体部～底部ケズリ。内-口縁部～体部ヨコナデ。底部匏ナデ。D. 白色粒・黒色粒・石英。E. 内外-橙色。F. 4/5。
2	土師器 甕	A. 口縁部径20.4、器高33.8、底部径4.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外-口縁部ヨコナデ。胴部～底部ケズリ。内-口縁部ヨコナデ。胴部～底部匏ナデ。D. 白色粒・黒色粒・石英。E. 内外-にぶい橙色。F. 口縁部～胴部1/4欠損。

は、古墳時代終末期と考えられる。

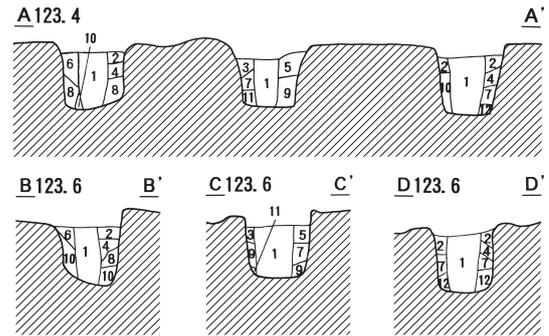
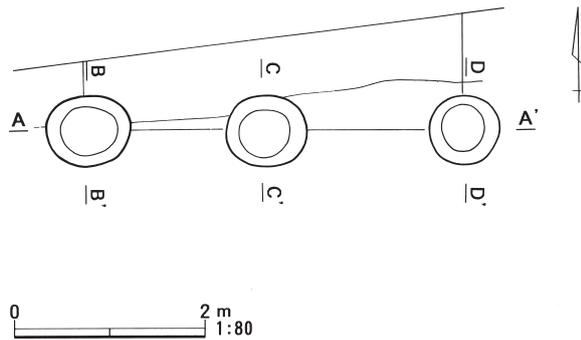
#### 4 掘立柱建物

1号掘立柱建物が調査区唯一の掘立柱建物である（第14図）。1Y-3グリッドにあって、調査区の北壁沿いに、ほぼ東西に連なる3基の柱穴を検出した。一部を東西に走行する1・2号溝に切られている。

形状は、東西2間、南北は不明で、規模は柱心間約2m、東西約4mを測り、主軸方向はほぼ真北を指す。各柱穴の平面形は、直径80cmの円形や、長径90cmの楕円形をなすものがあり、確認面からの深さは、70～80cmである。

土層断面には、明瞭に柱の抜跡が残り、内部にローム粒を含む暗褐色土が詰まっている。柱の抜跡は最深部にまで達してはいるが、底面に柱痕は見られない。抜跡の周囲には人為的に充填された土層が見られ、ローム粒を多量に含み、明黄褐色や明黄色を呈する層が目立つ。

遺物は、土師器の細片が若干出土したのみで、1号掘立柱建物の時期を明確に示す資料は検出されていない。



#### 1号掘立柱建物土層説明

- |         |                                   |         |                                   |
|---------|-----------------------------------|---------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土  | 径1～10mm程度のローム粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。  | 7 暗褐色土  | 径1mm以下のローム細粒を若干含む。しまり・粘性が若干ある。    |
| 2 明黄褐色土 | 径1mm以下のローム細粒を非常に多く含む。しまり・粘性が若干ある。 | 8 明黄褐色土 | 径5～10mm程度のローム粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。  |
| 3 明黄色土  | ロームブロックを多く含む。しまり・粘性が若干ある。         | 9 明黄色土  | 径1～10mm程度のローム粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。  |
| 4 暗褐色土  | 径1～5mm程度のローム粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。   | 10 暗褐色土 | 径1～5mm程度のローム粒を若干含む。しまり・粘性が若干ある。   |
| 5 茶褐色土  | 径1mm以下のローム細粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。    | 11 明黄色土 | 径1～10mm程度のローム粒を若干含む。しまり・粘性が若干ある。  |
| 6 明黄褐色土 | 径1～5mm程度のローム粒を含む。しまり・粘性が若干ある。     | 12 明黄色土 | 径10～30mm程度のローム粒を多く含む。しまり・粘性が若干ある。 |

第14図 1号掘立柱建物平面図・断面図

## 5 土坑

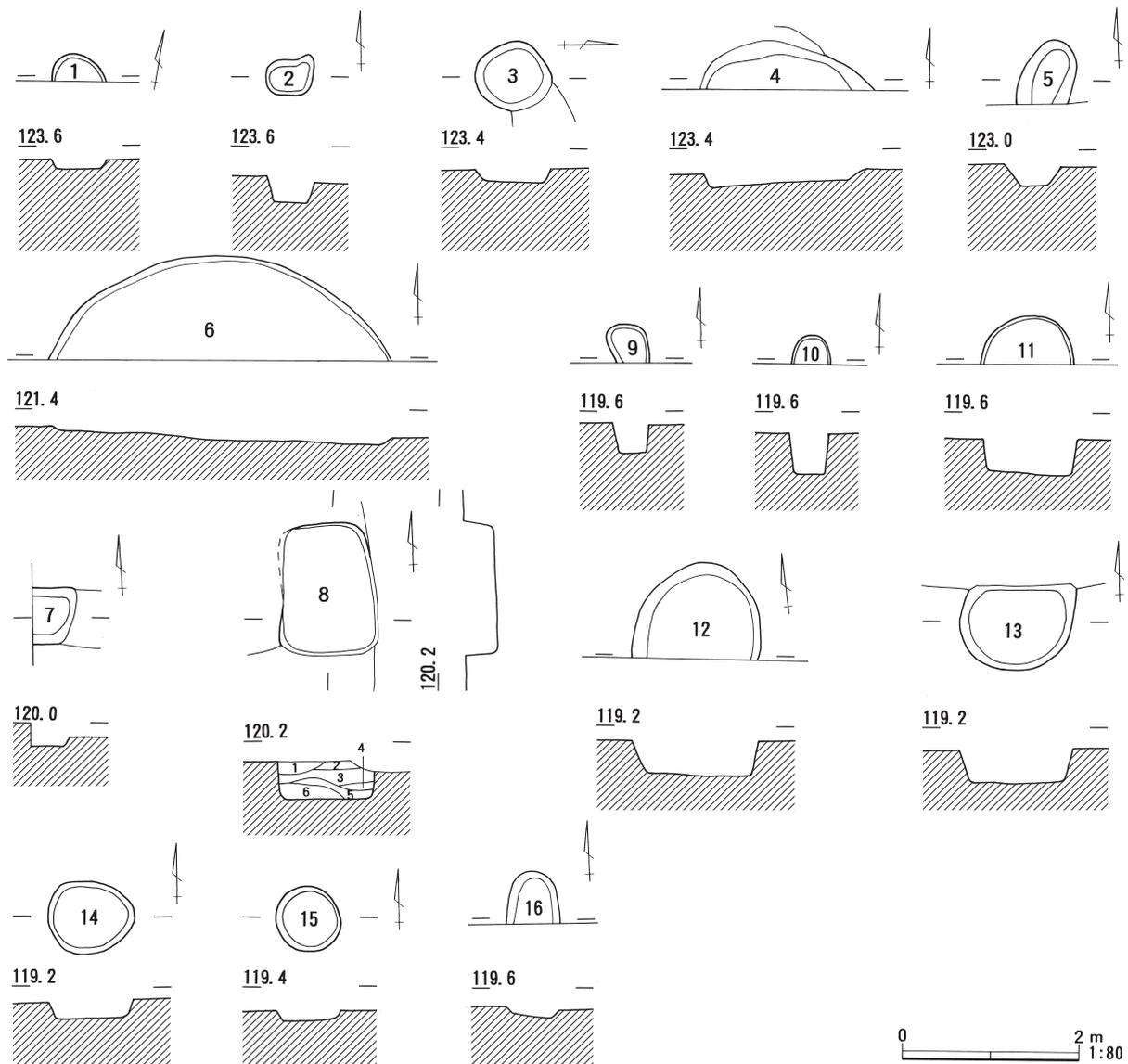
土坑は形状・規模とも多様で、出土遺物もなく性格の不明なものが大半である。その中で、6号土坑及び8号土坑は特徴的である。

6号土坑は、完掘できていないが、平面形が整円を成すとすれば、直径が4m程になると思われる大型の土坑である。確認面からの深さは15cmほどと浅いことから井戸ではなく、貯蔵坑としての機能を想定すべきかもしれない。

8号土坑は、やや隅の丸い、1.5×1.0mの長方形の土坑で、西壁の一部がオーバーハングしている。覆土には、ローム粒を多量に含む層が目立ち、自然堆積とは異なる不規則な堆積がみられることから、人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。柱穴や壁溝は確認できないが、全体の形状や覆土の特徴は、五十子陣跡や塩原屋敷遺跡といった中世遺跡で検出され、作業小屋や貯蔵施設と考えられている「竪穴状遺構」の状況に酷似している。

## 6 溝

溝は、いずれも掘り込みが浅く、緩やかに蛇行するものがほとんどで、水路や区画溝と認識できる例はない。1・2・17号溝では、覆土中に天明3(1783)年降下のAs-Aの混入が認められ、江戸中期以降の開削であることがわかる。他の溝も同様の時期の所産であり、多くは旧道路に伴う遺構と推定される。



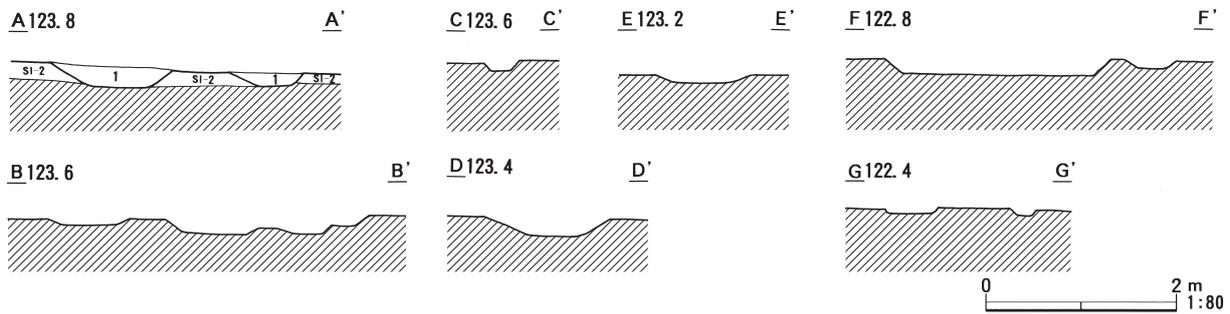
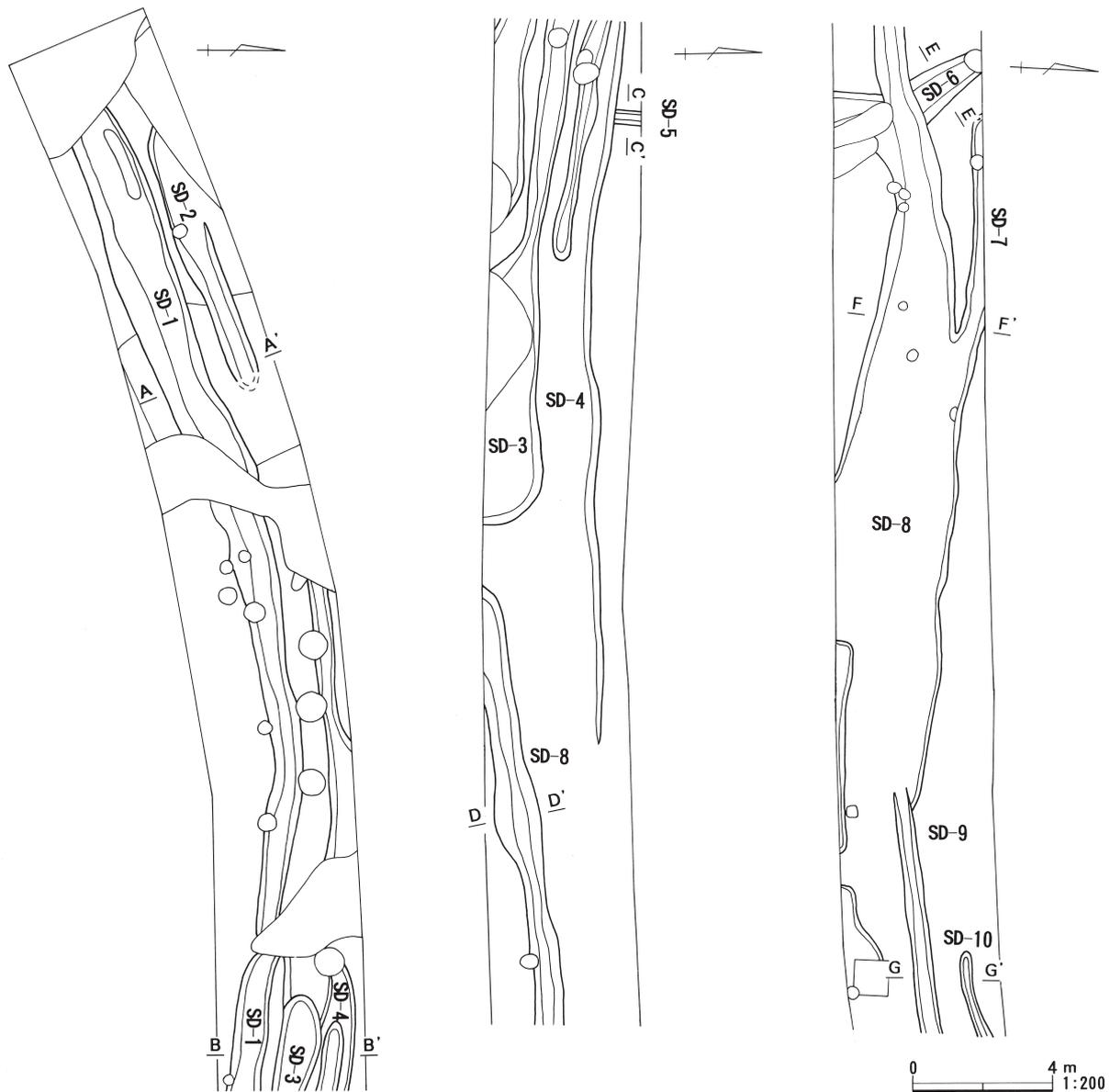
8号土坑土層説明

- |                                                                                                                                           |                                                                                                                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1 暗褐色土 径1~5mmのローム粒を多く含む。しまりは若干あるが、粘性はない。</p> <p>2 明黄褐色土 径1~5mmのローム粒を非常に多く含む。しまりは若干あるが、粘性はない。</p> <p>3 明黄褐色土 2層に類似するが、ローム含有率がさらに高い。</p> | <p>4 暗黄色土 径1~5mmのローム粒を若干含む。しまりは若干あるが、粘性はない。</p> <p>5 黒色土 黒色土を主に、ローム粒を若干含む。しまりは若干あるが、粘性はない。</p> <p>6 暗褐色土 径1~10mmのローム粒を若干含む。しまりは若干あるが、粘性はない。</p> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第15図 1~6土坑平面図・断面図

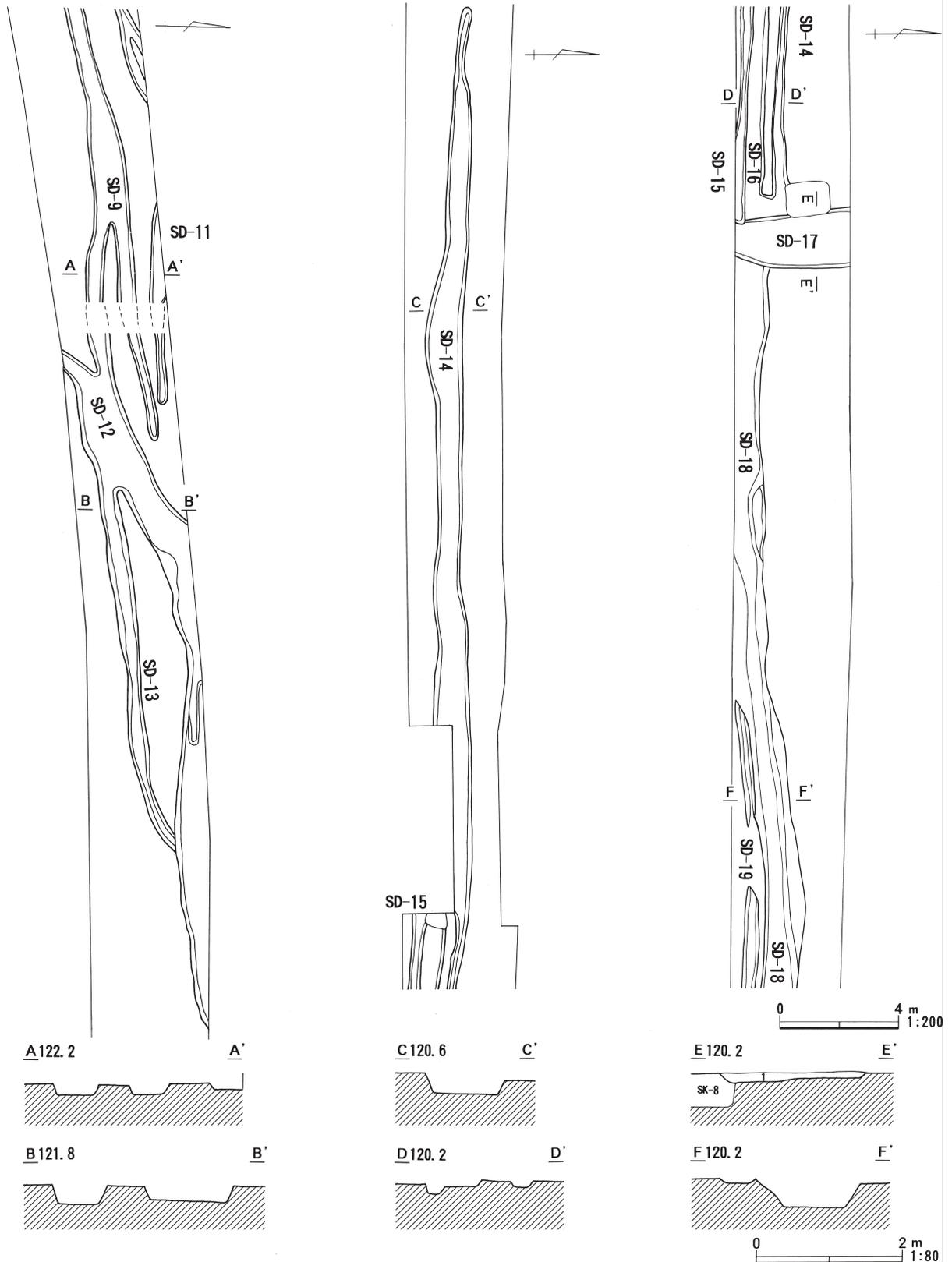
土坑一覧表

番号	位置	形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	番号	位置	形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1	1Y-3	不明	0.58	—	0.13	9	1E-2	不明	—	0.40	0.34
2	1X-3	不整形	0.53	0.40	0.30	10	1D-2	不明	—	0.42	0.47
3	1X-3	円形	0.87	0.79	0.17	11	1D-2	不明	1.04	—	0.40
4	1W-3	不明	1.95	—	0.14	12	1C-2	不明	—	1.44	0.38
5	1U-3	不明	—	0.62	0.23	13	1B-2	不明	1.28	—	0.38
6	1O-2	不明	3.85	—	0.10	14	1B-2	不整形	0.97	0.82	0.20
7	1K-2	不明	0.65	—	0.11	15	1A-B-2	円形	0.75	0.72	0.14
8	1J-2	長方形	1.53	1.08	0.43	16	1A-3	不明	—	0.60	0.10



- 1・2号溝土層説明 \*道路跡らしい
- 1 灰褐色土 As-Aを多く含む。しまりはあるが、粘性を若干欠く。

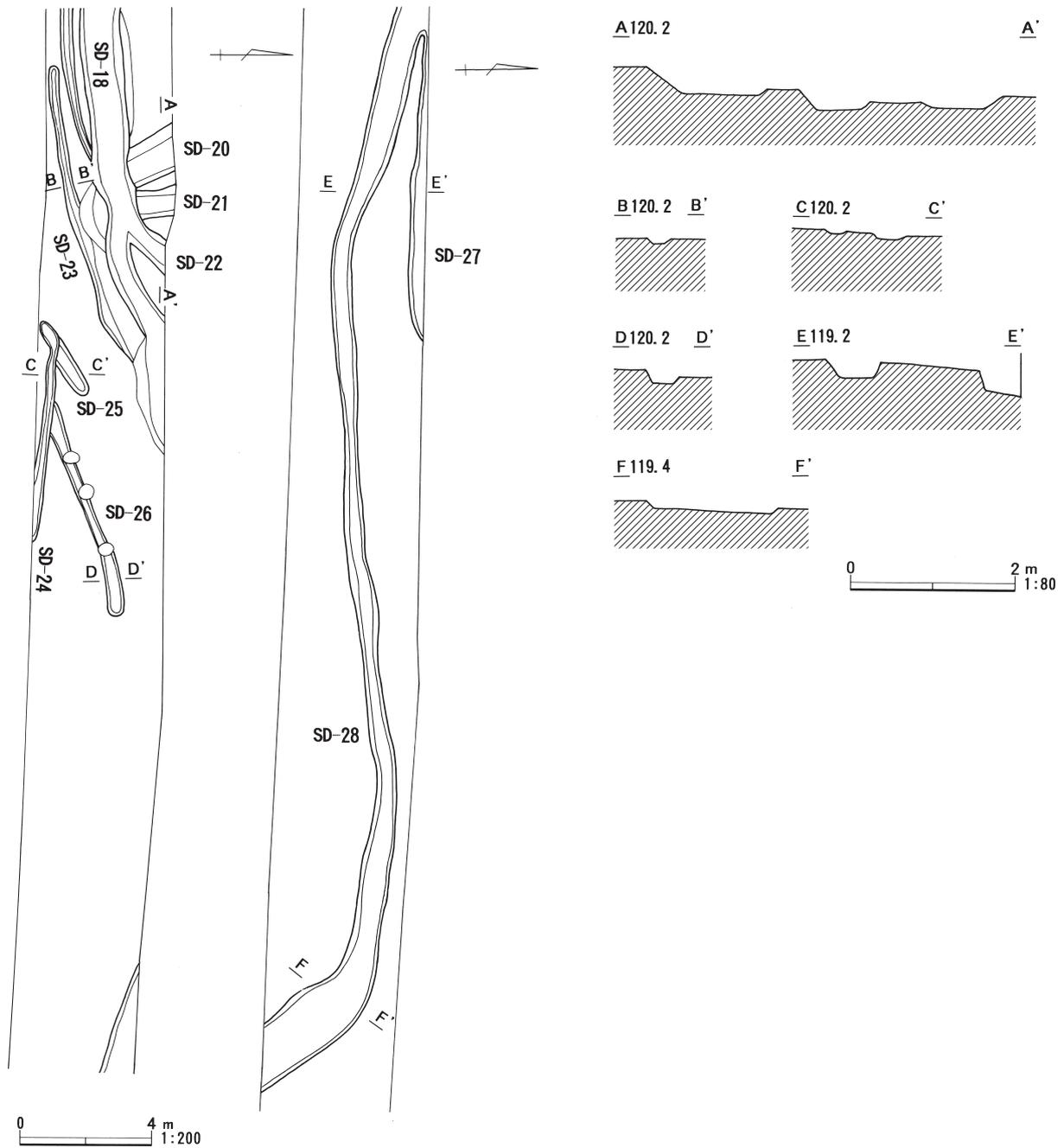
第16図 溝平面図・断面図(1)



17号溝土層説明 \*道路跡らしい

1 明灰色土 As-Aを非常に多く含む。下部に鉄錆層、大小礫が多く見られる。

第17図 溝平面図・断面図(2)



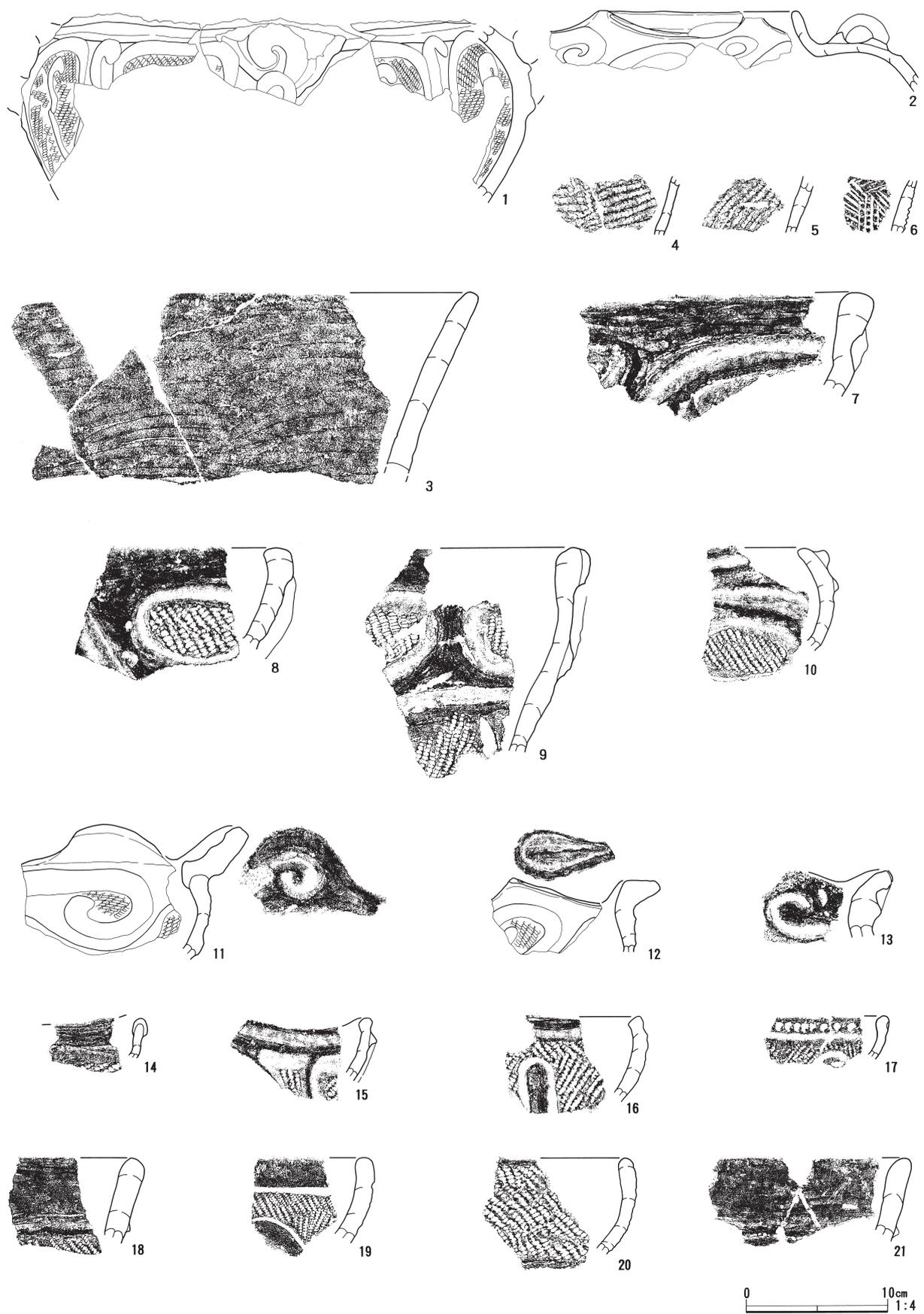
第18図 溝平面図・断面図（3）

## 7 遺構外出土遺物

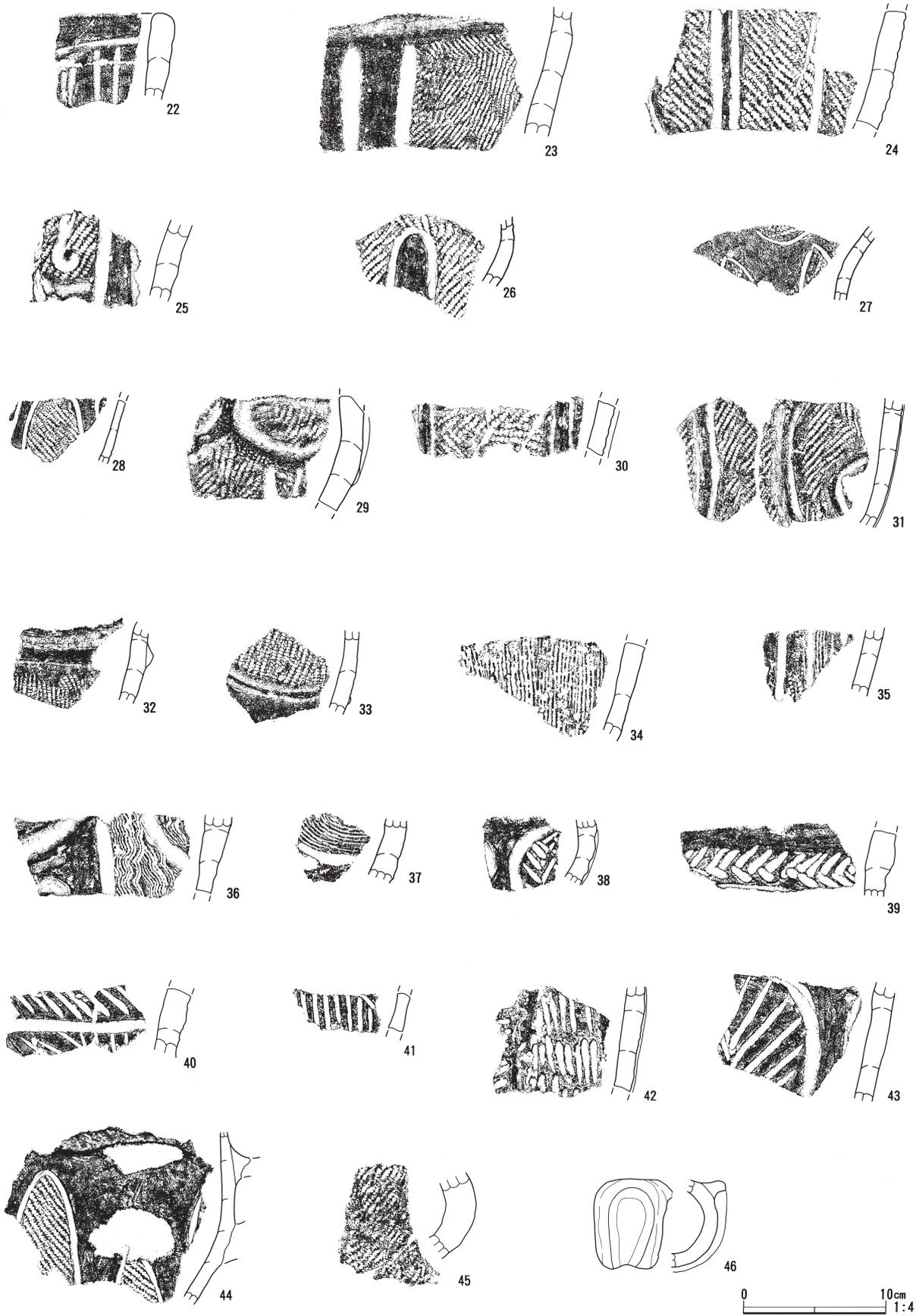
表土や遺構確認面の上層など、古墳、住居といった特定の遺構に伴わずに出土した遺物を、遺構外出土遺物として一括した。図示した遺物は、縄文土器、埴輪、須恵器の破片資料のみであるが、このほかにも土師器や近世陶磁器の小破片が出土している。

### （1） 縄文土器（第19・20図）

縄文土器は大半が中期後半の資料である。その中で、わずかに4・5が前期中葉、6が前期後葉の資料である。器種は3の浅鉢以外、深鉢、内耳壺がほとんどを占める。



第19圖 遺構外出土遺物(1)

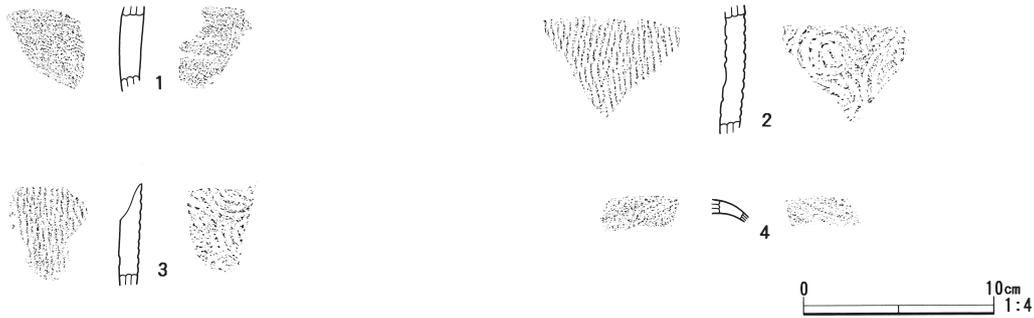


第20圖 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土遺物観察表

1	縄文土器 両耳壺	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—口縁部を横位隆帯で区画後、渦巻き状の隆帯を添付する。胴部は単節RL縄文を施文後凹線で区画及び施文する。内—横位のナデ。D. 白色粒・石英・黒色鉱物。E. 内外—明黄褐色。F. 胴部1/3残。G. 縄文時代中期後半。
2	縄文土器 浅鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—丁寧な磨き。口縁部に橋状の取っ手を添付。胴部は渦巻き状の沈線を施文する。内—丁寧な磨き。D. 片岩・チャート・黒色鉱物。E. 内外—にぶい黄橙色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
3	縄文土器 浅鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—横位のナデ。内—ナデ後磨き。D. 白色粒・チャート・黒色鉱物。E. 内外—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
4	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—単節RL縄文。内—磨き。D. 白色粒・繊維。E. 外—にぶい黄褐色、内—明赤褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代前期中葉。
5	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—単節RL縄文。内—磨き。D. 白色粒・繊維。E. 外—明黄褐色、内—明赤褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代前期中葉。
6	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—半截竹管状工具による矢羽根状沈線を施文後縦位の隆帯を添付する。隆帯上には刻みを施す。内—ナデ。D. 片岩・石英。E. 内外—にぶい黄褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代前期後半。
7	縄文土器 鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—弧状の隆帯添付後、隆帯脇に凹線。内—横ナデ。D. 白色粒・片岩。E. 内外—明赤褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代前期中期後半。
8	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—隆帯で弧状に区画後区画内に単節RL縄文を施文する。隆帯脇には凹線を施す。内—横位の磨き。D. 白色粒・片岩。E. 内外—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
9	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—口縁部を隆帯及び凹線で横位に区画する。口縁部は弧状の隆帯で区画後単節RL縄文を施文する。隆帯脇には凹線を施す。内—横位のナデ。D. 片岩・石英。E. 内外—にぶい褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
10	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—口縁部を隆帯及び凹線で弧状に区画する。区画内には単節RL縄文を施文する。内—ナデ。D. 片岩・石英。E. 外—にぶい褐色、内—にぶい赤褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
11	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—口縁部を隆帯及び凹線で横S字状に区画する。区画内には単節RL縄文を施文する。内—口縁波頂部に渦巻き状の凹線を施す。以下はナデ。D. 黒色鉱物・雲母。E. 内外—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
12	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—口縁部を隆帯及び凹線でS字状に区画する。区画内には単節RL縄文を施文する。内—横位の磨き。D. 片岩・石英。E. 内外—明赤褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
13	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—渦巻き状の凹線を施す。内—ナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 内外—橙色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
14	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—口縁部を隆帯及び凹線で区画する。区画内は単節RL縄文を施文する。内—横位の磨き。D. 白色粒・黒色鉱物。E. 内外—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
15	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—隆帯及び凹線で区画する。区画内は単節RL縄文を施文する。内—横位の磨き。D. 石英・黒色鉱物。E. 内外—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
16	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—単節RL縄文を施文後口縁部を横位の凹線で区画する。胴部は∩字状の凹線で区画し区画後は磨り消しを施す。内—ナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 外—橙色、内—オリーブ黒色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
17	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—単節RL縄文を施文後口縁部を横位凹線で区画する。口縁部直下には円形刺突を横位に施す。口縁部以下は弧状の凹線。内—横位の磨き。D. 片岩・チャート。E. 内外—橙色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
18	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—口縁部を横位隆帯で区画する。口縁部は無紋。胴部は単節RL縄文を施文する。内—ナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 内外—橙色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
19	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—単節RL縄文を施文後口縁部を横位沈線で区画する。口縁部は無紋。口縁部以下は弧状の沈線で区画し区画内は磨り消しを施す。内—横位の磨き。D. 石英・黒色鉱物。E. 外—橙色、内—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
20	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—単節RL縄文を施文後横位の凹線を施文する。内—横位の磨き。D. 片岩・石英・黒色鉱物。E. 内外—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
21	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外—横位隆帯により口縁部を区画する。口縁部は無紋。胴部は単節RL縄文か。内—横位のナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 外—にぶい褐色、内—にぶい黄褐色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。

22	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦位の凹線施文後、横位の凹線を施文する。内-横位の磨き。D. 石英・チャート。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 口縁部破片。G. 縄文時代中期後半。
23	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文を施文後2条以上の縦位の凹線を施文する。凹線間には磨り消しを施す。内-横位のナデ。D. 片岩・石英。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
24	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文施文後2条1対の縦位沈線を施文する。沈線間には磨り消しを施す。内-横位のナデ。D. 片岩・石英・黒色鉱物。E. 外-にぶい黄橙色、内-にぶい橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
25	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文を施文後縦位の沈線で区画、S字状沈線を施文する。区画内には磨り消しを施す。内-ナデ。D. 片岩・石英。E. 外-浅黄橙色、内-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
26	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文施文後∩字状の沈線で区画する。区画内には磨り消しを施す。内-横位の磨き。D. 石英・黒色鉱物。E. 外-橙色、内-褐灰色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
27	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-U字状・∩字状の沈線で区画を施す。区画内には単節RL縄文。内-横位のナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 外-明黄褐色、内-にぶい橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
28	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-∩字状の沈線で区画を施す。区画内には単節RL縄文を施文する。内-横位のナデ。D. 片岩・黒色鉱物。E. 外-にぶい赤褐色、内-橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
29	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-口縁部を隆帯及び凹線で楕円形に区画する。区画内には単節RL縄文を施文する。胴部は単節RL縄文施文後2条1対以上の沈線を縦位に施文し区画する。区画内には磨り消しを施す。内-横位のナデ。D. 片岩・石英・黒色鉱物。E. 外-淡黄色、内-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
30	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文施文後縦位の隆帯を添付する。内-横位のナデ。D. 白色粒・黒色鉱物。E. 外-褐灰色、内-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
31	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文施文後隆帯・凹線を弧状に施文する。内-磨き。D. 白色粒・石英。E. 外-にぶい黄橙色、内-にぶい赤褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
32	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-口縁部を隆帯・凹線で弧状に区画する。胴部は単節RL縄文。内-ナデ。D. 片岩・黒色鉱物。E. 外-橙色、内-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
33	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-隆帯を弧状に添付し区画する。区画内は単節RL縄文を施文する。内-ナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 外-黄灰色、内-浅黄色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
34	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦位の条線。内-磨き。D. 白色粒・片岩。E. 外-浅黄色、内-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
35	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文施文後縦位の条線を施し、2条1対以上の沈線を施文する。内-ナデ。D. 白色粒・片岩。E. 外-明赤褐色、内-灰褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
36	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-波状の条線を縦位に施文後、縦位・弧状の沈線を条線を施文する。内-横位のナデ。D. 白色粒・黒色鉱物。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
37	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-弧状の沈線による区画を施す。区画内には条線。内-ナデ。D. 片岩・黒色鉱物。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
38	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-隆帯・凹線で弧状に区画する。区画内には斜位の沈線。内-ナデ。D. 褐色粒・石英・黒色鉱物。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
39	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-矢羽根状の沈線を横位に施文する。内-ナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 外-灰黄褐色、内-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
40	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦位・斜位の沈線を施文後横位沈線を施文する。内-ナデ。D. 片岩・黒色鉱物。E. 外-にぶい赤褐色、内-明るい赤褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
41	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦位・斜位の沈線を施文する。内-磨き。D. 片岩・石英。E. 外-赤褐色、内-にぶい赤褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
42	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-隆帯添付後縦位・斜位の沈線を施文する。内-ナデ。D. 片岩・石英。E. 外-にぶい黄橙色、内-灰黄褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
43	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-斜位の沈線を施文後弧状の沈線で区画する。内-ナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 外-浅黄色、内-にぶい黄橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
44	縄文土器 両耳壺	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-副節縄文を施文後∩字状の沈線で区画する。把手部欠損。内-横ナデ。D. 石英・黒色鉱物。E. 内外-橙色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期後半。
45	縄文土器 両耳壺	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-単節RL縄文を施文する。内-ナデ。D. 片岩・石英・黒色鉱物。E. 内外-明黄褐色。F. 把手部。G. 縄文時代中期後半。
46	縄文土器 両耳壺	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-把手部周囲に隆帯添付後磨きを施す。内-ナデ。D. 片岩・石英。E. 外-橙色、内-にぶい褐色。F. 把手部。G. 縄文時代中期後半。



第21図 遺構外出土遺物（3）

遺構外出土遺物観察表

1	須恵器甕	B. ロクロ成形。C. 外一回転ナデ。5条1単位の櫛歯状工具による波状文を2段施文する。内一回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一灰色。F. 破片。G. 還元焰焼成。
2	須恵器甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 外一平行叩き。内一当て具痕跡。D. 白色粒・石英。E. 内外一灰色。F. 胴部片。G. 還元焰焼成。
3	須恵器甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 外一平行叩き。内一当て具痕跡。D. 白色針状物。E. 内外一灰色。F. 胴部片。G. 還元焰焼成。
4	須恵器甕	B. ロクロ成形。C. 外一回転ナデ。内一回転ナデ。D. 白色粒・褐色粒・黒色粒。E. 内外一灰色。F. 胴部片。G. 還元焰焼成。

調査区内では、須恵器や埴輪に比べ、比較的多くの縄文土器片を出土しているが、当該期の遺構は検出されていない。後代の風化作用によって、かつての地表面が大きく侵食され、これに伴って弥生時代以前の古い時代の遺構が消滅していると考えられる。

（2）須恵器（第21図）

1は須恵器甕口縁部の破片である。成形はロクロ成形で、内外面とも回転ナデによって丁寧な調整が加えられている。外面には5条1単位の櫛歯状工具によって、上下2段の波状文が背文されている。胎土には白色粒が目立つものの、良好な還元焼成で、色調は内外面ともに灰色を呈する。

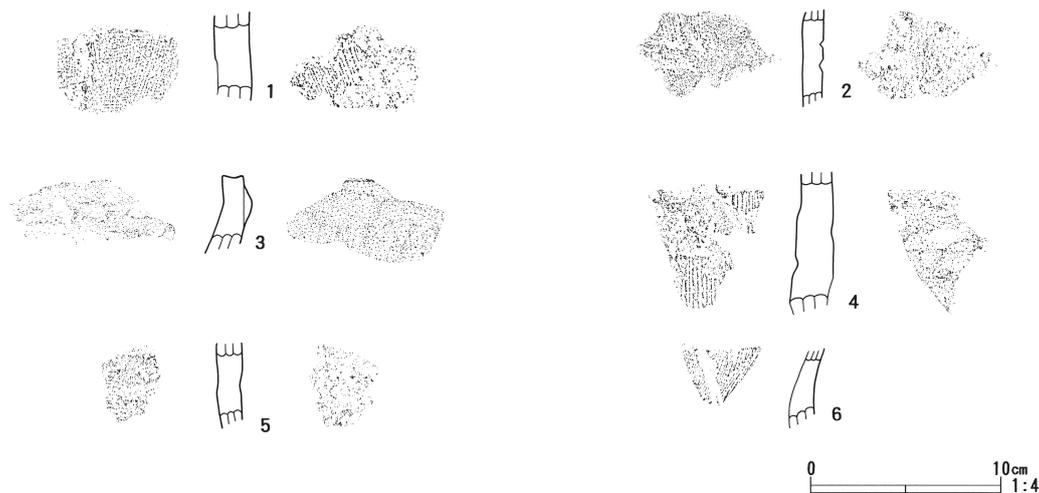
2・3も須恵器甕の胴部の破片であるが、成形は粘土紐積み上げによる。外面に平行叩き目、内面に当て具痕の青海波文が観察される。2の胎土には石英、3の胎土には白色針状物質の混入が認められる。ともに還元焼成で、色調は灰色を呈する。なお、3の胎土に含まれる白色針状物質の量は、きわめて微量である。

4は甕の肩部の破片である。成形はロクロ成形により、内外面とも横方向の回転ナデによって丁寧に仕上げられている。胎土・焼成とも良好で、色調は全体に灰色を呈するが、外面の一部には自然釉の付着が認められる。

（3）埴輪（第22図）

埴輪はいずれも形象埴輪の破片である。小片のため確実に器種の判明する個体は存在しないが、横方向へ緩やかに湾曲していることから、多くは器財形埴輪の本体の一部や台部、人物埴輪の胴部や台部の破片であると思われる。

1は外面に弧を描く2条の刻線が観察される。2条の弧状刻線間には赤彩が施されており、粘土帯の貼付ではなく、彩色によって器物に附属する紐ないし帯を表現した可能性がある。外面調整は横ハ



第22図 遺構外出土遺物（4）

遺構外出土遺物観察表

1	形象埴輪	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-横ハケ→縦ハケ後、2条1対の弧状沈線による区画を施す。区画内は赤彩。内-横ハケ。D. 白色粒・褐色粒・黒色粒・細砂。E. 外-にぶい褐色、内-橙色。F. 胴部片。
2	形象埴輪	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦ハケ。内-横ナデか。D. 褐色粒・片岩・チャート・細砂。E. 内外-にぶい橙色。F. 胴部片。
3	形象埴輪	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-ナデか。内-ナデか。D. 石英・チャート・細砂。E. 内外-橙色。F. 口縁部片。G. 磨滅著しい。
4	形象埴輪	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦ハケ。内-ナデ。D. チャート・細砂・雲母。E. 内外-橙色。F. 胴部片。
5	形象埴輪	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦ハケ。内-ナデ。D. 片岩・チャート・細砂。E. 外-にぶい褐色、内-橙色。F. 胴部片。
6	形象埴輪	B. 粘土紐積み上げ。C. 外-縦ハケ。内-不明。D. 褐色粒・チャート・細砂。E. 内外-橙色。F. 胴部片。G. 内面剥落。

ケののち、縦ハケが施され、胎土には細砂を多く含む。

2は器壁が薄く、直線的に立ち上がっている。胎土に片岩やチャートの混入が目立つ。

3は縦方向にも緩やかに屈曲する個体で、上部部は円筒埴輪の口縁部状に成形されている。また、上部部直下の外面には、断面三角形の突帯が1条めぐっている。調整は内外面ともナデである。砂礫を含まず精良な胎土を用いているが、全体に磨耗が顕著である。色調は、1・2とは異なり、比較的鮮やかな橙色を呈している。

4は器壁の厚い個体で、内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。砂粒を多く含み、重量感がある。器財、人物などの台部の破片である可能性が考えられる。

5も器壁の薄い破片で、胎土に片岩やチャートの混入が目立つことや、色調がにぶい褐色を呈することなど、2と類似した点が多い。

6は緩やかに外湾する破片で、内側は剥離面となっている。外面調整は、他の資料とは異質な細かい縦ハケを施している。

## <参考文献>

- 池上 悟 1980 「東国における胴張り石室の様相」『立正史学』第47号 立正大学
- 太田博之 2014 『長沖古墳群Ⅶ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第39集 本庄市教育委員会
- 太田博之 2017 『長沖古墳群Ⅶ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集 本庄市教育委員会
- 大熊季広ほか 2002 『長沖古墳群Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第36集 児玉町教育委員会
- 大熊季広ほか 2003 『長沖古墳群Ⅳ』児玉町文化財調査報告書第37集 児玉町教育委員会
- 大熊季広ほか 2004 『長沖古墳群Ⅴ』児玉町文化財調査報告書第38集 児玉町教育委員会
- 大塚昌彦ほか 2014 『長沖古墳群Ⅳ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第42集 本庄市教育委員会
- 大塚昌彦ほか 2017 『長沖古墳群Ⅵ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集 本庄市教育委員会
- 君島秀勝・大谷 徹 1999 『長沖古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第234集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 恋河内昭彦ほか 2006 『長沖古墳群Ⅵ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦ほか 2008 『長沖古墳群Ⅷ』本庄市遺跡調査会報告第21集 本庄市遺跡調査会
- 恋河内昭彦ほか 2011 『長沖古墳群Ⅸ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦ほか 2012 『長沖古墳群Ⅺ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦ほか 2015 『長沖古墳群Ⅹ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集 本庄市教育委員会
- 埼玉県立本庄高等学校 1975 『いぶき』8・9合併号
- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪の編年の諸問題」『第6回三県シンポジウム埴輪の変遷—普遍性と地域性—』群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
- 坂本和俊 2008 「北関東（埼玉・群馬・栃木）の大型円墳の築造動向」『前期・中期における大型円墳の位置と意味』第13回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳』 さきたま出版会
- 菅谷浩之ほか 1980 『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第1集 児玉町教育委員会
- 菅谷浩之 1984 『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史資料調査報告古代第1集 児玉町教育委員会ほか
- 菅谷浩之ほか 1990 『秋山古墳群—庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査—』児玉町史資料調査報告古代第2集 児玉町教育委員会・児玉町史編さん室
- 杉崎茂樹 1989 「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』第87号 早稲田大学考古学会
- 鈴木徳雄ほか 2007 『長沖古墳群Ⅶ』本庄市遺跡調査会報告第14集 本庄市遺跡調査会
- 鈴木徳雄ほか 2011 『長沖古墳群Ⅹ』本庄市遺跡調査会報告第41集 本庄市遺跡調査会
- 関 義則・宮代栄一 1988 「県内出土の古墳時代の馬具」『紀要』14 埼玉県立博物館
- 南毛古墳文化研究会 2001 『本庄市域における古式古墳調査の成果と課題』第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料
- 日高 慎 1994 「Ⅳ詳細調査の概要 2遺物の概要」『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』 埼玉県教育委員会
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』畿内編 山川出版社
- 増田逸朗・坂本和俊ほか 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 増田一裕 1990 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅳ—御堂坂2号墳の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告第16集 本庄市教育委員会
- 松本 完 2002 『本庄遺跡群発掘調査報告書—御堂坂第1号墳の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告第24集 本庄市教育委員会
- 的野善行 2014 『長沖古墳群Ⅻ・女池遺跡Ⅳ・西富田新田遺跡Ⅱ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集 本庄市教育委員会
- 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第五巻 近畿Ⅰ 角川書店

写 真

写真 1



調査着手前状況 [西から]



調査着手前状況 [東から]



調査区風景 [西から]

写真 2



調査区風景 [西から]



調査区全景 [東から]



調査区全景 [東から]

写真3



174号墳 [北東から]



174号墳 [南西から]



175号墳 [東から]

写真 4



209号墳 [北から]



1号住居 [南東から]



2号住居 [南西から]



1号掘立柱建物 [南東から]



8号土坑 [北から]



12号土坑 [北から]

写真6



13号土坑 [北から]



14号土坑 [北から]



9・10号溝 [南東から]

写真7



9・11・12号溝 [南東から]



12・13号溝 [東から]



14号溝 [西から]

写真 8



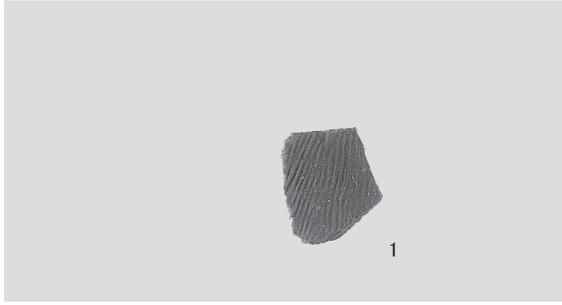
20・21・22号溝 [東から]



27・28号溝 [西から]



15・16号土坑・28号溝 [東から]



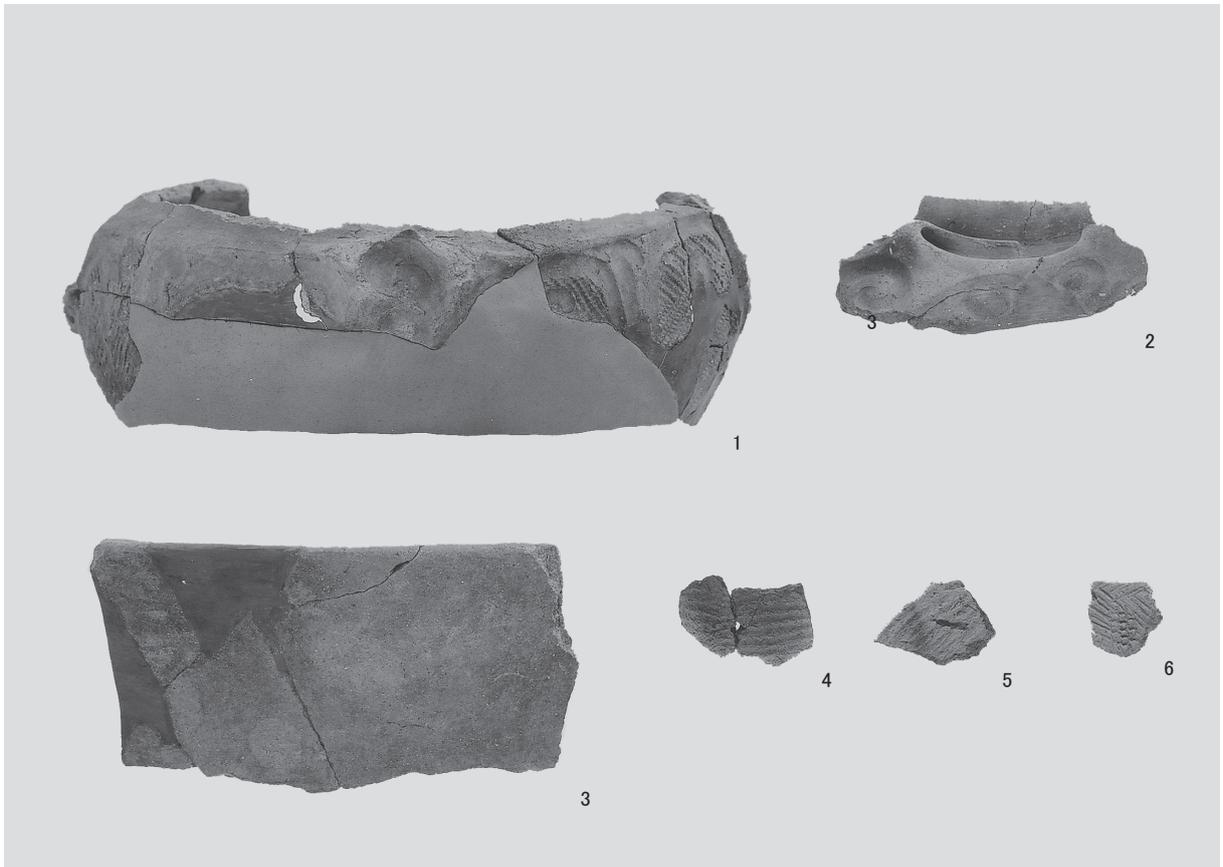
175号墳出土遺物



1号住居出土遺物

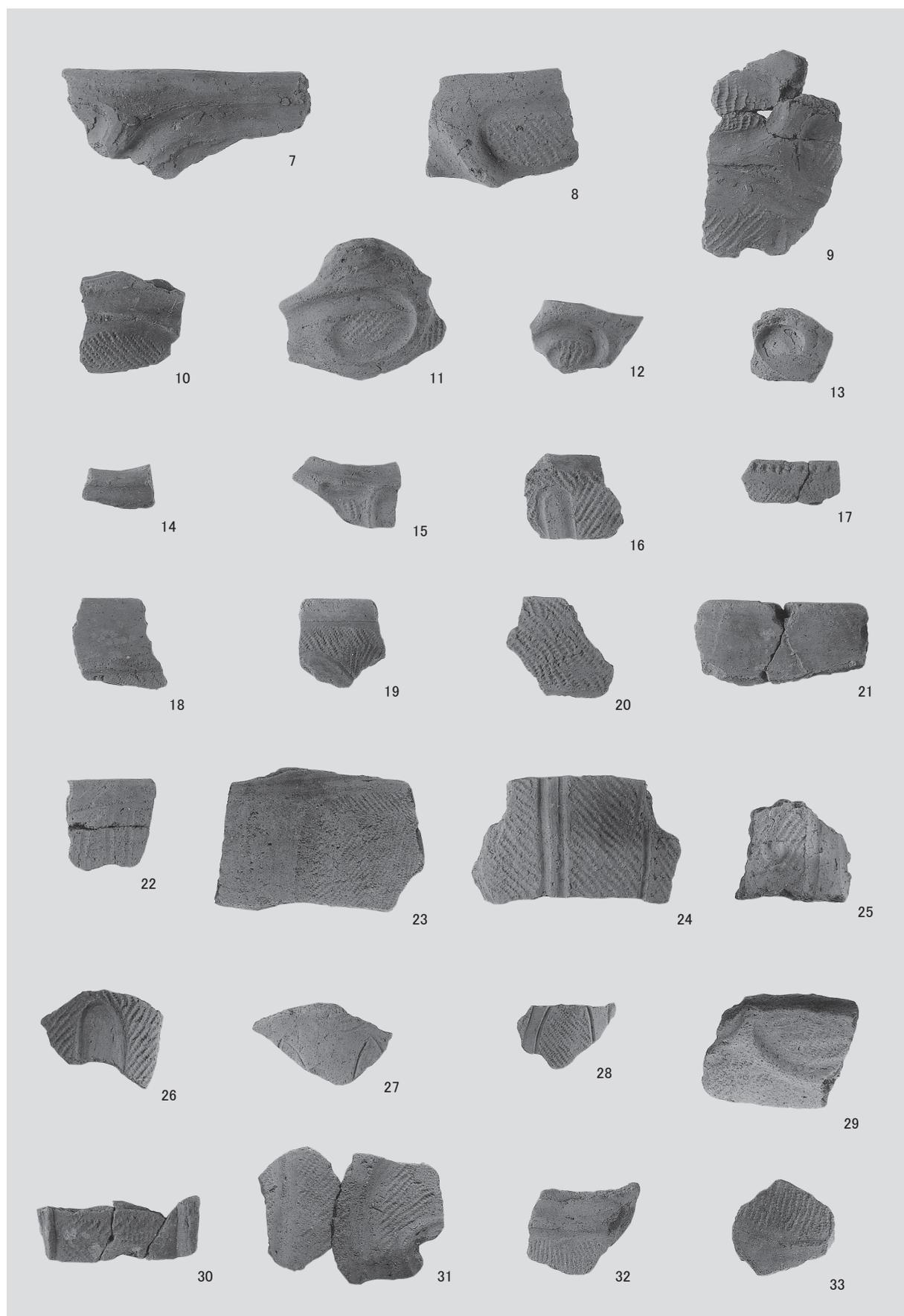


2号住居出土遺物

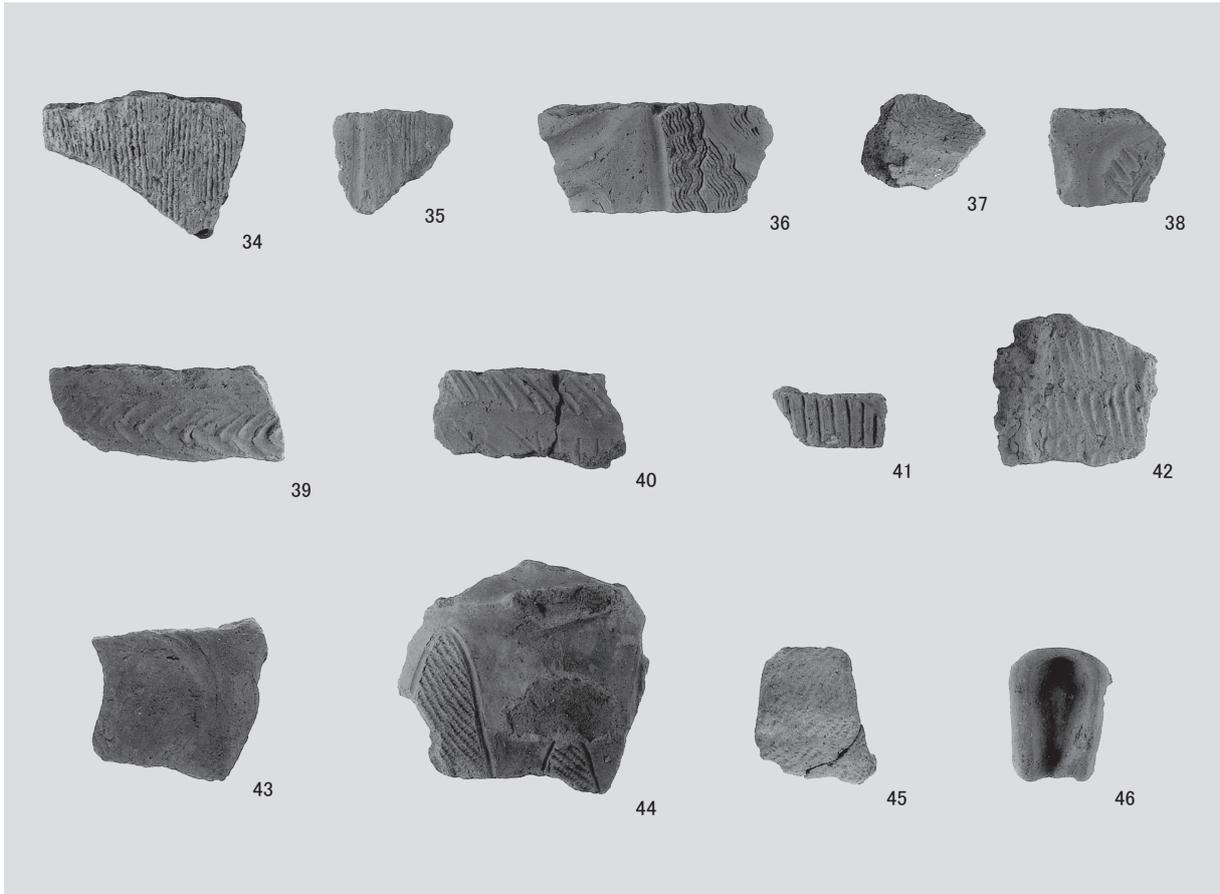


遺構外出土遺物 (1)

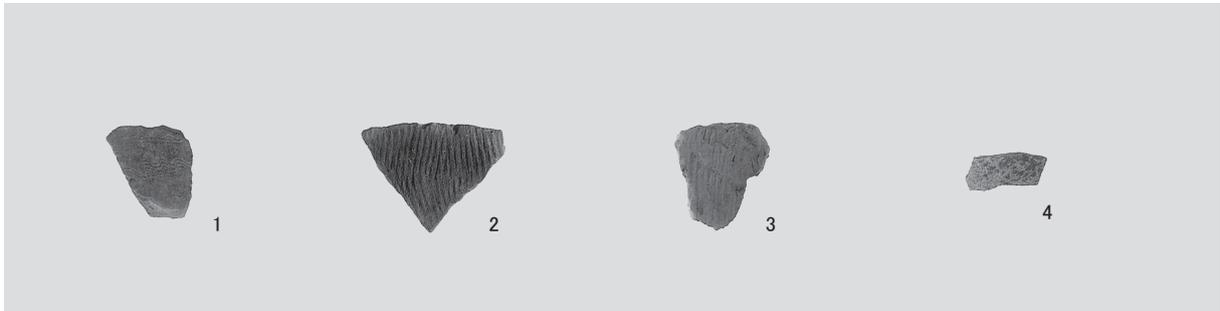
写真10



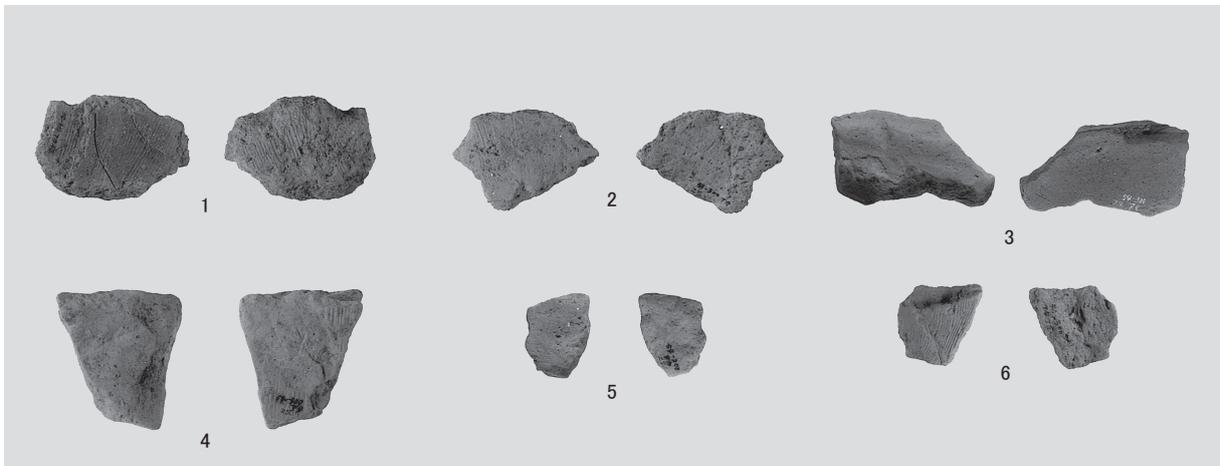
遺構外出土遺物（2）



遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物 (4)



遺構外出土遺物 (5)

# 報 告 書 抄 録

フリガナ	ナガオキコフンゲン							
書名	長沖古墳群Ⅷ							
副書名								
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書				巻次	第55集		
編著者	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2018年(平成30年) 3月 30日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ ー ド 市町村	ド 遺跡	北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積	調査原因
ナガオキコフンゲン 長沖古墳群	ホンジョウシコダマチョウカナヤアサカサカ 本庄市児玉町金屋字赤坂	112119	54-300	36° 10' 30"	139° 07' 15"	19951210 ～ 19960325	1,200 m <sup>2</sup>	道路建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	古墳群	古墳時代	古墳4基、住居2棟ほか		埴輪、縄文土器ほか			

---

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第55集

# 長 沖 古 墳 群 XVIII

—赤坂地区の調査—

---

平成30年 3月26日 印刷

平成30年 3月30日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／山進社印刷株式会社